

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の 教育



特集

第62回

日本保育学会から

好評連載

『幼児の教育』

ネット公開によせて12

12

2009

一人ひとりの子どもの育ちをどう捉えるか

# 保育所児童保育要録の書き方

## 保育所児童 保育要録 の書き方

一人ひとりの  
子どもの育ちを  
どう捉えるか

民秋 言 著

小学校とのよりよい「連携」のために  
要録作成の基本がわかる17事例掲載

保育要録に対する疑問を解決!

- ・保育所児童保育要録とは?
- ・なぜ、保育要録を作成するの?
- ・保育所は何を小学校に伝えるの?

保育要録の記入のポイントがわかる!

- ・家庭の事情はどのように扱う?
- ・育ちを捉えるポイントとは?
- ・養護とは? 教育とは?

36210

### □保育要録に対する疑問を解決!

- ・保育所児童保育要録とは?
- ・なぜ、保育要録を作成するの?
- ・保育所は何を小学校に伝えるの?

### □保育要録の記入のポイントがわかる!

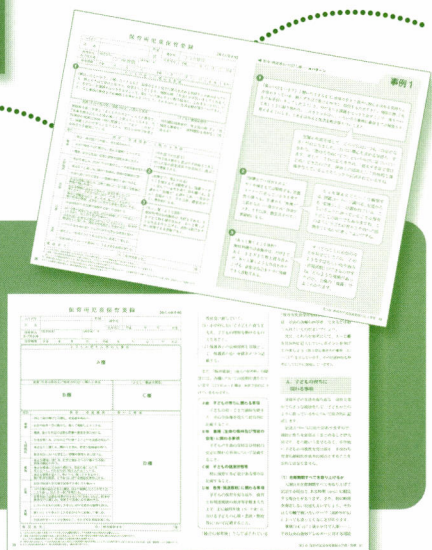
- ・家庭の事情はどのように扱う?
- ・育ちを捉えるポイントとは?
- ・養護とは? 教育とは?

保育要録に対する疑問を解決!  
この1冊で  
記入のポイントがわかる!

民秋 言/著

小学校との連携のために必要となる  
「保育所児童保育要録」について、  
作成のねらいや一人ひとりの子ども  
の育ちを捉えた記入のポイントをわ  
かりやすく整理した入門書。

26×19 cm 96ページ 定価 1,050円(税込)



キダーブックの

## フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第108巻 第12号



# 幼児の教育

第108巻 第12号

巻頭言

幼児が表現することは

名須川知子

4

もくじ



—特集—  
第62回  
日本保育学会から

保育士養成校卒業生の就労意欲

尾木まり

8

「トリアマワークショップ」による

保育者養成の意義

小林由利子

12

病児の不安を緩和するための入院パンフレット

大沼郁子

18

報告「保育学会を見てきました」

佐藤嘉代子  
児玉理紗  
安田真穂

24



最終回

園長のまなざし第12回

日本の豊かな文化に触れる

木村英美

30

最終回

子ども文化の詩字(6)

遊びつくすこと

森下みさ子

32

最終回

保育中の物語(12)

「おにいさん」と「おにいちゃん」

岸井慶子

38

「幼児の教育」ネット公開に寄せて(12)

倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たちの実践研究の歩み

立浪澄子

42

保育の現場から

雪に暮らし、雪と遊ぶ子どもたち

伊藤克実

48

お茶の水女子大学「幼保大」連携保育研究の試み(36)

さまざまな現場にある保育者の共同省察

佐治由美子・猪本こを

54

幼児の教育 第二〇八巻(平成二十二年)総目録

60





## 巻頭言

# 幼児が表現することとは

名 須 川 知 子

現在は幼児たちの発達保障のために、従来とは異なった意味で幼児教育の重要性が増しています。まさに、就学前機関としての保育の場が必要とされています。それは、今この時代の幼児の育ちがますます難しい環境におかれているからです。幼児の育ちは、自然環境、すなわち心地よい光、空気、大地が必要とされます。そして、温かいまなざしが必要です。それが、人間による社会現象によって失われていき、失われたものに対する気づきと焦りがみられるのが現代の特徴でしょう。

しかし、現代を生きている私たち大人は、この自覚のもと、意識して目の前の幼児たちに対応していかなくてはなりません。

では、どのように環境を整えていかなくてはならないのでしょうか？ その具体的



な手立てを考えられるのが「保育内容」領域だと思えますが、なぜその方法をとるのか、その内容を選択するのか、ということを常に考えていく必要があります。さまざまな具体的な方法が浮かびますが、最近特に思うことは、幼児の生活と保育内容のつながりの重要性です。

たとえば、十二月になると多くの幼稚園で「クリスマス会」が行われます。これは、厳密に考えると一つの宗教的な行事ですが、わが国では信仰とは無関係に実施されることがあります。従って、サンタクロースが登場したりするのは、この現象は「日本版クリスマス」として生活に関連しているからいいのではないか、という考えもあるでしょうが、保育内容の意味から考えた場合、やや問題ではないかと思えます。どのような行事であれ、活動であれ、幼児の真の成長に役立つものを選択、吟味して行い、その成果を評価すべきものであると考えます。

このような行事への見直しは多くの問題を含んでいます。たとえば「例年やっているから」とか、「わが国における年中行事の一つだから」という理由だけでは心許ないのです。今、目の前にいる幼児にもっとふさわしい、栄養の糧となるような内容の教材を研究していくことが求められます。行事の見直しそのものは、年度末にじっくり行つてほしいものです。その際、幼児たちのこれまでの一年の育ちを振り返り、またこれからの育ちを心に描いて何が適切なのか、ということがまず考えられるべきで



しよう。

しかし、行事だけではなく、日々の保育についても生活と保育内容のつながりが問われます。たとえば、「遊びと表現」のつながりです。これは、長年意識してきた研究テーマですが、昨年度まで四年間幼稚園園長を務めた経験も含め、実践的なテーマとして、今年五月の保育学会で発表しました。

もともと保育内容の「表現」とは、音楽的なこと・美術的なこと・身体表現的なこと・劇表現的なことが混ざり合ったものではなく、もっと根本的な、幼児自身があらわしたいと思っていること、活動している間に思いついて考えたこと、あるいは「あらわそう」という意志以前に幼児の姿・行動に思わず出てしまったこと、が根底にあるのではないのでしょうか。そして、その思いをあらわす媒体として、自分の身体・声・音・ものなどがつかわれている……。そうしたことが領域「表現」の考え方の基本にあるべきだと思います。そう考えると幼児の生活・遊びから表現をとらえる方向性が生み出されるのでしょうか。しかし、この考え方は、実際の保育者にとって難しい点もあったようです。何がひっかかるかという点、それは「表現」という言葉であり、その言葉が「形としてあらわれる」という枠組みを与えてしまうのです。

週案の中で、各担任が「研究テーマ(遊びと表現)に対する評価」を記述しています。一学期には「活動ばかりに目がいってしまふ」「遊びと生活のつながりがもてな





い「遊びが単発で充実感がもてない」など、思いきり遊ぶ姿と表現のかかわりが見えない、という課題ばかりが浮上していました。そこには、もつと長い目で幼児の遊びを見るべきだ、反対に瞬間にも遊びと表現はつながっている、いや本当は幼児の遊ぶ姿こそが表現ではないのか、といったさまざまな思いがめぐっていました。しかし二学期以降の記述の中で「きれいな空、と保育者が空を見上げて感動していると、そばにいた幼児が上を見上げると同時にジャンプして空に手を届かせようとしている」という文章がありました。その時「ああ、これが表現なんだ」ということに気づいたといえます。遊びや生活の中で身近な自然に気づき、その思いを共有できた時に表現する姿を見つけることができます。思いきり遊べることで、すでにそこに表現している姿がみられるのです。その感動した気持ちをあらわす方法としてさまざまな媒体を環境として準備すること、それも一つの重要な環境構成ではないか、と考えます。

幼児期のこのような基本的な経験を通して、大人になって芸術作品にも出あうことができるのでしょうか。幼児期から「創造的表現活動」や「創造的芸術活動」という用語を適用することが可能だと思います。そうすることで、人間の育ちの可能性をさらに未来に向かって広げてくれる「希望」という文字が浮かび上がってきます。それが幼児の発達を保障する一つの手立てではないか、と考えています。

(兵庫教育大学教授)

# 特集

第六十二回日本保育学会から

## 保育士養成校卒業生の就労意欲

### 職業選択肢としての家庭的保育

尾木まり

#### 家庭的保育者の資格要件

家庭的保育は、家庭的保育者の居宅で、主として三歳未満の少人数の子どもを対象に行われる保育です。地方自治体の単独事業として長い歴史をもち、特に乳児保育の需要の高い都市部で低年齢児保育を担ってきました。児童福祉法改正（二〇〇八年）により二〇一〇年から児童福祉法に位置づけられた保育事業として施行されます。

家庭的保育の特長の一つは常に同じ保育者が保育を行うことにありますが、保育者の居宅で行われる家庭的保育の質を確保し維持するためには、この保育が保育士によって行われることが基本であると考えられます。

しかし、一部の地方自治体では保育士を募集しても応募がないため、家庭的保育者の資格要件を幼稚園教諭免許や教員免許に、または研修受講を課して子育て経験者にまで拡大してきたという経緯があり

ます。

一方で、二〇〇〇年に国が創設した家庭的保育事業では資格要件を保育士と看護師に限定したため、資格要件を拡大してきた地方自治体が国庫補助事業を導入しにくいという事態がおきました。

このような背景を踏まえ、本研究は「家庭的保育のあり方に関する調査研究」（日本子ども家庭総合研究所）の一環として、保育士資格保有者（以下、保育士）が家庭的保育の潜在的保育者となる可能性を探ることを目的として行ったものです。

### 研究の方法

社団法人全国保育士養成協議会の協力を得て、保育士養成校の卒業生（卒後十年以上）を対象に、郵送法による質問紙調査を実施しました。送付数は養成校7校1490件、有効回収数459件（有効回収率30・8%）でした。

### 家庭的保育への関心と職業選択肢

調査対象者は卒後二十年以上が多く（65%）、四十歳代以上が70%を占めました。また、ほとんどが保育士資格と幼稚園教諭免許を併有し、保育所（44%）または幼稚園（34%）での勤務経験がありました。現在も保育職に就く人は約64%、保育所勤務の人は34%でした。また現在就労していない人（104人）のうち三分の二は資格を生かした職に就くことを希望していました。

家庭的保育の認知度は、「聞いたことはあった」、「あまりよく知らない」が約60%と高いとはいえませんが、約65%は「もつとよく」、「もう少し知りた」と関心を示しました。

また、質問紙に家庭的保育の概要を示し、家庭的保育を行ううえで必要な環境について尋ねたところ、「国や自治体による支援」、「医師や保健師などの

関係機関との連携」(いずれも82%)が高い割合で選択され、次いで「一定の収入の確保」、「家庭的保育者同士のネットワーク」などが選択されました。

さらに、「家庭的保育はあなたの職業の選択肢になるか」に対しては、「なるかもしれない」(50%)、「かなりなる」を合わせて55%が職業選択肢となりうると考えていることがわかりました。

### 家庭的保育の必要条件

家庭的保育を実施する地方自治体は約八十か所(二〇〇八年度)であり、首都圏に多いなど地域的な偏りがあるため、全体的な認知度は低かったのですが、保育士養成校の卒業生の過半数が、家庭的保育が職業選択肢になり得るとする結果は、注目に値します。今後は、養成校の乳児保育などの教科目で家庭的保育が取り上げられる機会も増え、認知度や職業選択肢とする割合も上がるのではないかと考

えられます。

一方、調査対象者がその必要性を指摘する支援体制や関係機関連携は、従来の家庭的保育では十分に整備されてこなかった部分です。調査対象者は施設型保育の経験者を含んでおり、また保育の基礎的知識をもつからこそ、安心して保育をするための必要条件として、支援体制や関係機関連携を挙げたのではないかと考えられます。つまり、家庭的保育に保育士のなり手が少なかった要因は、従来の家庭的保育にはこれらが欠如していることを、保育士が見抜いていたためではないかと推察できます。

居宅で行う保育は施設型保育とは異なる困難が伴います。施設長としての役割から用務まで、さまざまな役割を一人でこなす能力と、とっさの判断力が求められます。保育所のような豊かな経験をもつ多職種のある職場で行われるオンザジョブトレーニング(現職研修)も期待できません。保護者への対応



はもとより、健康管理やストレスマネジメントも自分自身で行わなければなりません。今回の法定化に伴い、ようやく家庭的保育の支援体制整備が市町村の責任として位置づけられ、保育所との連携などその一環として進められ始めています。

現在、国は待機児童問題を早急に解消すべき課題としており、家庭的保育はその解決策の一つとされています。そのため家庭的保育者を短期間に増やすことを目的に、児童福祉法改正（二〇〇八年）で保育士資格を保有しない場合も、認定研修により家庭的保育者となる道を開きました。しかし、性急に家庭的保育者を増やすことに着眼するのではなく、まずは、支援体制や労働環境を充実させたいうえで、保育士が「これならやれる」と思えるような家庭的保育とすることが、保育の質を確保しつつ、量を増やす近道であることが本研究の結果から示唆されます。

（子どもの領域研究所所長）

特集

第六十二回日本保育学会から

「ドラマワークショップ」による

保育者養成の意義

「遊び」の再経験

小林由利子

1. はじめに

平成二十年三月二十八日に公示された「幼稚園教育要領」の領域表現の改訂の要点において、「遊具や用具などを整えることに加え、他の幼児の表現に触れられるように配慮したりし、表現の過程を大切に<sup>注1</sup>して自己表現を楽しめるように工夫すること」が、「内容の取扱い」として新たに加えられました。このことを受けた保育者養成の具体化例として、表現する過程を重視した「ドラマワークショップ」の可能

性を考えました。学生たちがこの授業を経験することを通して、この「過程を大切に<sup>注1</sup>して自己表現を楽しむ」むことを実感し、この経験について考え、理解を深め、保育で具現化できるようにするのが、<sup>注1</sup>か、と考えました。本論における、「ドラマワークショップ」とは、ドラマを使った参加型の演劇作品の上演を目的にしない、ドラマをすること自体を目的にした過程中心のグループ活動をする授業のことです。「ドラマワークショップ」では、ファシリテーターという進行役がいて、インプロビゼーション

〔「即興」の意〕という活動を参加者が経験します。

本論の研究目的は、保育者養成において「ドラマワークシヨップ」を学生たちが経験する意義を明らかにすることです。研究方法は、「ドラマワークシヨップ」の授業で行われるインプロビゼーションという具体的なドラマ活動例を検討することです。

さまざまな実践者がインプロビゼーションの理論と方法論を提示しているので、今回は、「劇的遊び(dramatic play)」についての著作<sup>註2</sup>があり、俳優、脚本家、演出家、ドラマ教育の実践者、研究者、教育者であるバージニア・グラスゴー・コウステイ(Virginia Glasgow Koste)のインプロビゼーションを取り上げることにします。

## 2. 遊び／ドラマ／演劇という連合体

学生たちが子どもたちの「表現する過程を大切に  
して自己表現を楽しめるように工夫」できるように

なるためには、学生自身が表現する過程を経験し、自己表現する楽しさを味わうことがまず必要だと思います。その具体的な方法の一つとしてコウステイのインプロビゼーションが可能と考えました。しかし、ゲーム的なインプロビゼーションというドラマ活動だけではこのことを達成するのに不十分です。

インプロビゼーションは、学生同士が知り合い、グループとしての関係を発展させ、自己理解と他者理解を深め、諸感覚を鋭敏化するためなどには効果的といえます。そのようなことを基盤にして、保育者として求められる表現は、保育者自身に表現力があるだけでなく、子どもが表現したいという「心情、意欲、態度<sup>註3</sup>」をどのようにして理解し、援助し、指導するか、ということにかかっています。

したがって、「ドラマワークシヨップ」で用いられるインプロビゼーションから、物語や絵本を劇化するアメリカのクリエイティブ・ドラマ、社会的問

題とリンクさせながら洞察力を養成するイギリスのDIE (Drama in Education)、演劇作品の鑑賞および上演をめざす児童演劇までを学生たちが実践を通して学ぶ必要があります。つまり、「遊び／ドラマ／演劇」という一連の連合体について、実践と理論を行き来しながら考えるということです。そのことをT大学人間科学部児童学科では、保育者養成カリキュラムにおける具体的な授業科目として次のように構成しました。

- ・ 一年生：「ドラマワークショップ」
  - ・ 二年生：「演劇文化論」「保育内容表現指導法」
  - ・ 三年生：「児童演劇研究」「特殊研究」
  - ・ 四年生：「卒業研究」
- 子どもの「自発的な活動としての遊び<sup>遊</sup>」を理解し、援助し、指導することについて考え、具現化するための一つ方法としてドラマ／演劇を通じた活動が、可能ではないかと考えます。

### 3. 「ドラマワークショップ」の活動例と考察

「ドラマワークショップ」におけるインプロビゼーションは、一九八三―一九八五年にかけてイースタン・ミシガン大学大学院演劇学研究科子どもためのドラマ／演劇プログラムのコーステイによる「インプロビゼーション」という授業で実施された活動に基づいています。今回は、第一回目の授業で行われた二つのドラマ活動を取り上げて検討します。

#### (1) 名前をつける

- ① ファシリテーターは、「自分に名前を付けましょう。きょう、わたしはチャーリーです」と言い、チャーリーという名前を出席簿に記入します。
- ② 学生にニックネームではない、新しく自分になりたい名前を付けるようにファシリテーターは言います。

③ はじめに学生の本名を呼び、次に学生が自分に付



けた名前を聞き、出席簿に記入します。

④次週にその名前を呼び、また新しい名前を出席簿に記入します。これを一五回継続します。

### 〈考察〉

学生たちは、初回は戸惑いを示しますが、回数を重ねるごとに自然に名前を言えるようになっていきます。学生たちは、なぜこんなことをするのかと疑問をもちますが、徐々に他者がどのような名前を付けるかに興味を示したり、シーケンス（つながり）をもって名前を付けたりするようになります。

自分に新しい名前を付けるということは、別の人に比べてみる経験です。つまり、学生が「○○」と新しい名前を思いつく瞬間は、学生がある人物を演じていることになり、言い換えれば、自分ではない誰かになっている経験をしていることです。このほんの一瞬の経験を重ねることによって、学生たちは現実とは別の世界で誰かを演じ

ることが自然にできるようになっていきます。この現れは、前週の名前で学生を呼ぶと、戸惑わずに即座に新しい名前を言うことから、読み取ることができます。このことは、学生が子どもと「こっこ世界」を共有するために求められる即応性が獲得できたことを示していると思います。

### (2) 跳んで挨拶

①ファシリテーターは、学生たちに「部屋の中央に集まりましょう」と言いながら、できるだけお互いに近づいて立つように促します。

②ファシリテーターは、最初にジャンプしながら、「では、みなさんジャンプします。ジャンプ、ジャンプ！」と声をかけます。

③ファシリテーターは、全員がジャンプするのを確かめて、「ジャンプしながらできるだけたくさんの人とあいさつしましょう」と言い、ジャンプしながらすぐに隣にいる学生と握手し、「こんにち

は！」と言います。

④ ファシリテーターは、次々に学生とジャンプしながらあいさつをします。

⑤ 次に、ファシリテーターは、ジャンプしながら、「今度は、握手のかわりに、優しく頭に触れます」と言い、すぐに近くにいる学生の頭にそっと触れながら「こんにちは！」と言います。

⑥ 強くだたかないように「優しくね」と学生たちに声をかけます。

⑦ ある程度学生たちがあいさつをしたところで、ファシリテーターは「おしまいです」と言います。

⑧ 円くなって座りドラマ活動で感じたこと、考えたこと、ねらいなどについて全員で話し合います。

#### 〈考察〉

ファシリテーターが、先にジャンプし始めると、学生たちが密集しているため、思わずつられてジャンプしてしまうという状況が発生します。従って、

最初に学生たちを中央に集めるということは重要なポイントとなります。つまり、環境がジャンプするように方向づける役割を果たしています。ジャンプすること、あいさつすること、握手することなど、日常で行うことを組み合わせることによって、別の不可思議な世界が立ち現れてきます。そのことが何となくおかしく感じとれて、自然に笑いが生じます。言い換えれば、学生たちは、自分たちがつくりだした想像的な世界を経験していることになりました。さらに言えば、このドラマ活動を通して、学生たちは、遊びの要素である、楽しさ、リラクセスすること、笑い、現実とは異なる別の世界などを体験できると考えます。つまり、学生たちは、大人として遊びを再経験しているのです。

学生たちは、なぜこのようなことをするのだろうかと不思議に思いますが、ドラマ活動をした後に、円くなって座って、お互いに考えや気づいたことや

意見を言ったり、聞いたりすることを通して、活動のねらいについての考えが深まっています。さらに、自宅でノートに活動内容、考察、ねらいなどを記述することを通して、さらに活動の意味を考えるようになっていきます。このようにドラマ活動を経験し、話し合い、ノートにまとめるということを繰り返すことにより、学生たちはインプロビゼーションというドラマ活動について、子どもの遊びについての理解を深めていくと考えます。

#### 4. おわりに

今回は、インプロビゼーションというドラマ活動例の考察を通して、「ドラマワークショップ」が、子どもの遊びを体験的に理解するきっかけになり、遊びの重要な要素である楽しさと想像的世界を経験する場になっている、と考えました。「ドラマワークショップ」は、学生たちが子どものしている遊び

をそのまま経験するのではなく、子どもの遊びの要素を組み合わせて再構成されたインプロビゼーションというドラマ活動で、子どもが遊びで経験しているような状況を経験している、と考えます。

今後は、「ドラマワークショップ」の実践事例を取り上げて、学生が何を経験しているかについて、明らかにしていきたいと思えます。そして、学生の遊びの再経験について、遊び／ドラマ／演劇という連合体の関係性について演劇の視点から考えていきたいと思えます。

(東京都市大学人間科学部教授)

#### 注

- 1 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 二〇〇八年 6頁。
- 2 Koste, V. G., *Dramatic Play in Childhood: Behavioral for Life, LA: Anchorage Press, 一九七八年参照*。
- 3 同右 288頁。
- 4 同右 29頁。

特集

第六十二回日本保育学会から

病児の不安を緩和するための入院パンフレット

その制作・効用・改訂について

大沼郁子

はじめに

A病院のB女医から「子どもが入院の際に抱く不安感を緩和するような絵本を紹介してほしい」とメールがあつたのは、二〇〇六年二月のことでした。すぐ絵本を担いでA病院を訪れましたが、B女医は「どれも直接的ではない」と不満げです。つまり、A病院独自の入院案内のパンフレット（以下入院パンフ）がほしい、でも、それにどのような情報を盛り込むのがよいのかわからない、という状態でした。

調査

部外者の私はずっとわかるはずがないと思つて、たところ「ボランティアとしてA病院で過ごし、自分の目で何が必要か見てほしい」と頼まれました。そこで二〇〇六年三月二十日から二十九日までの十日間、私はA病院の小児科病棟で過ごし患児にとつて何が不安なのかを調査しました。しかしこの時、この入院パンフを欲していたのはB女医だけで、ほかの看護師や医師たちには、私が誰で何の目的で来

たのか周知徹底されてなかったため居心地の悪いこと、このうえもありませんでした。それでも患児や保護者から、入院時の不安や知りたかった情報を、おしゃべりや遊びを通して聞かせてもらいました。

私が病院の人間ではないことがわかると、いろいろな話をしてくれました。この時はっとしたのは、保護者たちが病院側から入院生活や病気についてなんの説明も受けていないと、言ったことでした。擁護するつもりはありませんが、そんなことはないはずです。しかし、病気のわが子を前に医療者から説明を受けても耳に入っていないことは、容易に想像できません。この入院パンフでは、親たちの心の状態も考えなくてはならないと思いました。

すでに配布されていたチラシには「持ち物・病棟図・日課」がありました。私は病棟での聞き取りや他病院での調査を経て、この三つを含め十二項目にまとめました。必要な情報をただ箇条書きにして

も、子どもは手に取りません。そこで、各ページに手で触れる仕掛けをつくることで、視覚にも訴えるようにしました。

### 問題点

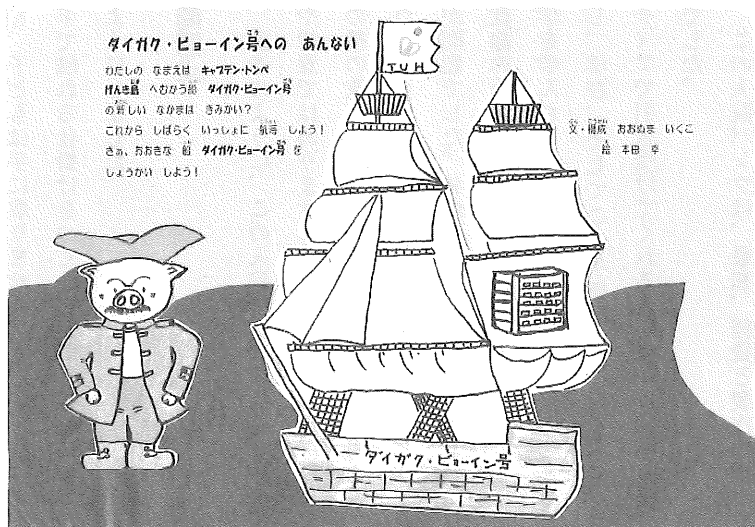
前述のように、この入院パンフは病棟全体の要望や総意ではありませんでした。ですから、制作とその後改訂時には、他病院の医療者の協力を得ました。さらに経費は○円なので、絵描きをどうするか問題でした。私が頼んだのは、十年以上の幼稚園教諭の経験があり、大学院時代の同級生で共に児童学を学んだ本田幸さんでした。子どものことを理解し、学び、そしてこの手間のかかる作業をボランティアで引き受けてくれる人をほかには知りませんでした。

この入院パンフは、最初、経費と製作作業を個人が負担し、カラーコピーのステープラとじの簡易

版で三十部を作りました(二〇〇七年四月)。その後、様子を見ながら改訂していきたくと考え、本田さんが看護師・患児・保護者へのアンケートを作成して協力をお願いしたのですが、病院側からのフィードバックが全く無いまま、さらに一年が経過しました。きつと不評だったのだろうと諦めていた時、A病院の医事課から、正式に病院オリジナルパンフとして発行したいので、印刷業者を介して三百部作成して無料配布する、と連絡がきました。これをきっかけに改訂を加えて発行することになりました(二〇〇八年四月一日発行)。

### 内容と改訂

①表紙 コンセプトを表現しています。対象年齢は六歳。19頁の絵本形式のパンフで、キャプテン・トンペというブタの船長が率いる船乗りたちが「ビューイン号」という帆船で「げんき島」に向



▲入院パンフレット表紙

かうというストーリーです。船旅にしたのは、退院や完治する日時を明確に伝えられないという医師のジレンマを表現するためです。

②ビョーイン号に乗るときに必要なもの カバンを開けると持ちものの絵が出てきます。改訂版ではカバンの裏にメッセージを書き込めるようにしました。

③ビョーイン号の掟 病院での日課です。守るべきルールも、このストーリーに合わせて「掟」としました。

④ビョーイン号のフェロー 医療スタッフの紹介です。初めての場所で、聞きたいことを誰に尋ねたらいいのでしょうか？ 大人だつて不安になります。そこで医師、看護師、受付、院外学級の先生、看護助手、理学療法士、心理士、ボランティア、栄養士、改訂後はさらに麻酔科医、ソーシャルワーカーを加え十一名のスタッフに加えて、

「じぶんのなかま」を描く欄も設けました。

⑤ナースステーション A病院のユニークな試みとして、患児たちが病棟内の放送設備で消灯コールをします。マイクに向かってその台詞が言える入院生活に慣れたことになるそうです。そこで、吹き出しにその台詞を入れ、一日も早く言えるようにしました。

⑥げんき島への道のり おおよその入院期間・病状・治療を説明するページです。これももつとも頭を抱えたところでした。患児や家族が知りたいのは「いつ治るか」であるのに、医療者はそれを断言することはできません。医師の「治った」という言葉を期待している患児や家族は、その医療者の当然の対応に不満を感じているということを知りました。そこで私は、「海図」を用いました。げんき島に向かう波を罫線に見立て、治療法を書き込めるようにしました。これは子ども向け

のカルテです。海図（治療計画）に従って旅（治療）すれば、げんき島に行く（退院する）ことができる。でも、台風の日（苦痛）や大きな魚（アクシデント）に出あうことがあるので、退院の日を断言することはできないけれどみんな頑張り、という意味を込めました。改訂後には新たに「けんさ島」や「しゅじゅつ城」を加え、「しんぞうカテールの山々」「CITのどうくつ」という検査内容説明のページを入れました。

⑦ビョーイン号の詩人スマイリー・ポエム 患児だけでなく、付き添いのお母さんたちの心の支えになる言葉を集めました。金子みすゞや八木重吉をはじめ、子ども向けには日本音楽著作権協会に規定の料金を払って「アンパンマンのマーチ」（やなせ・たかし詩）などを多数セレクトしました。改訂版には、自分の好きな言葉を書き込む欄も作りました。

⑧買い物 A病院は地元では最も大きな病院で売店もたくさんあります。改訂版では「あつたらしいなお店」を設け、子どもたちが好きなお店を描き込めるようにしました。

⑨びょうとうの地図 わかりやすい入院パンフの中で、このページはわざとわかりにくくしました。七種類のキャラクターたちの台詞をヒントに病棟からキャプテン・トンペを探すという遊ぶ地図です。キャプテンの帽子が落ちている部屋に実際に行くと、そこにキャプテン・トンペのプレートが出迎えてくれるという仕掛けがあります。

⑩マダム・ブツクの本だな 絵本のブツクリストです。リストは本棚のポケットから取り出して見る仕掛けです。物語絵本、学習の絵本、病氣・病院がテーマの絵本、命がテーマの絵本、そして付き添いのお母さんを励ます本というカテゴリーにして、三十二冊をセレクトしました。改訂版では、



四十五冊に増冊しました。私はこのリストの最後に「一冊の絵本のちからは小さくても心を潤す一滴のしずくになりますように。暗い部屋を灯すほのかな明かりになりますように」という一文を入れました。これは私の入院パンフへの想いであり、折りでもあります。

⑪病院周辺の地図 これは家族のためのページです。地元住民でない家族の助けになればと思ひ、コンビニエンスストア、ファミリーレストラン、ドラッグストア、スーパーマーケット、菓子店、総菜・弁当屋、宅配ピザ、花屋、ホテル、美容院と全二十七軒に掲載の承諾を得ました。改訂版では家族のための滞在施設も加わりました。

⑫心の地図 患児が自由に描き込める心の地図を作りました。描いた絵を通して、言葉にできない患児の想いを看護師や心理士にくんでもらえたらと思っています。

### おわりに

入院パンフの作成開始から、まもなく四年の月日が経とうとしています。私に依頼したB女医はすでにA病院を去り、相変らず医療者からの声はありません。医事課によれば、すでに二百部以上配布し、患児からは「おもしろい、楽しい」、保護者からは周辺地図が便利という反応があるとか……。

しかし、この入院パンフを対外的な見せかけだけのサービスで終わらせないためにも、フィードバックや改訂が必要です。今後、医療以外の他分野との協力によりこのようなツールが作られることで、医療者が「病气」だけではなく「心」を含めた子ども全体を見ることになるのではないのでしょうか。この入院パンフが、コミュニケーションツールとしても活用されることを願っています。

(日本女子大学大学院・宮城学院女子大学非常勤講師)

特集

第六十二回日本保育学会から

報告「保育学会を見てきました」

佐藤嘉代子  
児玉理紗  
安田真穂



記念講演「『いのち』の輝き」を聴いて

「小児科医としてのスタートをきった時代は、小児癌はまだ治らない時代で、この子らのために何ができるかを、自分たちで考えなければなりませんでした。自分はまだ大人だけど、ついこの間までは子どもだったから、子どもたちが困っていたら、彼らの立場に立って一緒に困ってあげられるだろう。彼ら

と一緒に何とか解決の方法を見つけてやろうとしていた時のことです」と、小児科医細谷亮太氏による講演は始まりました。

まず、病状が進み、レベル4の小児癌をわずらう六歳の男児Aと、骨折で入院している六歳男児Bとの交流を描いたビデオが上映されました。隣同士のベッドで過ごす二人が互いを思いやる様子に、会場はたちまちくぎ付けになりました。

「夜は寝ないんだ。見てあげてるの、(看護婦さん)を呼ぶから」と重症のA児を思いやるB児。一方、絵本を読んであげようとして、車椅子に移って移動してこようとするとB児に「気をつけてきてね」と声をかけるA児。「何がいい?」と携えた三冊の絵本の中から好きなものを選ぶように尋ねるB児の姿など、さりげないけれどしっかりと支え合う関係が胸を打ちます。

B児が外泊して翌日病院に戻ると、隣のベッドが空っぽでした。「いつから?」と尋ねながら、悲しみをこらえているのがわかります。混乱しつつも葬儀に出てあげたいと、友達の「死」に向き合おうとし、時間をかけて徐々に現実を受け止めていくB児。A児が寝ていたベッド横の窓ガラスの上に、退院の際、ふと見つけたミッキーマウスのシール。姿が見えなくなったA児を思い出すよりどころを得て、心の中に友人の存在を取り戻していく、という

内容でした。

「子どもってどういうものなのか! 六歳になるとこんなにも深いきずなが育まれるんです。医者という仕事は形が見えるけれど、保育はこのような子どもたちを育てることなんです」と細谷氏は話されました。また、自分が勤務する病院の理念に触れ「きちんとしたものは百年たっても二百年たっても揺るがないものです」と話されていました。理念に貫かれる姿勢と、その想いを支える言葉、「変えられないものを受け入れる心の静けさと、変えられないものを変える勇氣と、その両者の違いを見分ける<sup>えい</sup>叡智を」と結ばれた言葉が印象に残りました。学会準備委員長の榎沢良彦氏は、「『命を感じ合っている』と感じました。心を感じ合っているところに希望があると思います」と感想を述べられました。「『いのちの輝き』への想いが講演の舞台からあふれ、会場全体に通奏低音のように流れ出していました。

保育制度の大きな変革の渦にのみ込まれそう  
今、たくさんの会場における学びが幅広く交錯し合  
い、個性的で多様な調べとなり、それぞれの音色が  
響き合い、あたかも壮大な交響曲「子どもの詩」が  
奏でられているような印象を受けました。

(佐藤・お茶の水女子大学大学院生)

### 学生の立場から考える保育者養成

初めて保育学会に参加し、その規模の大きさにま  
ずもって驚かされました。これほど多くの方が保育  
や子どものことについて考えているのだということ  
を体全体で感じ、これならきつと未来の子どもたち  
は大丈夫だと樂觀的な気持ちになりました。

私は保育者養成に関するシンポジウムを二つ聞き  
ました。一つは、新幼稚園教育要領と新保育所保育  
指針を踏まえた保育者養成の課題について考えるシ  
ンポジウム。もう一つは、職業的保育者養成に特化

しない「総合的保育者養成」のあり方を提案するシ  
ンポジウムでした。私は学部で幼稚園教諭免許を取  
得し、今年の四月から大学院で学んでいます。この  
保育学会で保育者養成について考える機会を得たこ  
とは、大学四年間で学んできたことを振り返り、そ  
の学びを私なりに消化し位置づけることだと感じま  
した。

二つのシンポジウムを聴き、大きく三つのことを  
考えました。一つ目は、保育をする学生に、生きる  
力や生活力といったものが欠けているという問題に  
ついてです。子どもが抱えている問題と学生が抱え  
ている問題は同じだという話もありました。確かに  
そうかもしれません。私自身、保育実習で出会った  
子どもと自分を重ね合わせて考えることは何度かあ  
りました。しかし、だからこそ感じられる子どもの  
思いがあり、子どもの肩に重くのしかかるものに、  
より近くから思いをはせることができるという可能

性はないでしょうか。今のこの時代を生きる子どもたちと似た社会の中で育ってきた学生だからこそ感じるような気がするのです。

二つ目は、学生と大学教員、そして学生と実習先の保育者の間に結ばれる保育的関係についてです。これはまさに私が四年間で感じてきたことでした。授業で保育を学び、実習先では子どもとじかに触れ合いそこから保育を考えます。それはいつも保育をする側からの学びです。しかし、学生が、授業や実習の中で大学教員や保育者から受け取り経験してきたものは、保育そのものであったように思います。学生は保育をする体験と同時に保育をされる体験をしているのです。たとえば、大学の先生や保育者に対して自分のどんな話しても、耳を傾け、受け止めてくれるという安心感がありました。それは、子どもが日々の生活の中で感じている保育者への安心感と同じようなものだと思います。保育をされる体

験をすることで、学生は保育を肌で感じるようになります。保育をする側とされる側両方を体験できるのは学生の貴重な体験の一つであると思います。

最後は、保育者養成における学生の声についてです。学生は大学の保育者養成カリキュラムに沿って学んでいきますが、学生の学びはそこで終わりません。授業や実習の中で先生や保育者から聞いた言葉は、その後、自分自身の文脈の中で再構築されていきます。「あの時言われたことはこういうことかもしれない」と自分なりに思い返し、記録や考察、論文などを通して学生自身の声としながら、もう一度意味を塗り変えていくことが、私にとっては本当の学びであったように思います。学生の学びがその場の一度きりのものでなく、省察され再構築された時に、それを言葉にし、共有できる機会が必要なのではないかと今思います。

初めての保育学会は、過去を振り返り自分なりの

再構築をしていく、そんな時間であったように思います。

(児玉・お茶の水女子大学大学院生)

### 初めての保育学会へ大切なきっかけ

今回初めて参加した保育学会は、私にとつてとても刺激的なものでした。今まで大学の中でしか保育を学んでいなかった私は、保育学会という、全国から保育を学ぶ人々が集まる場所に行くということだけで少し緊張していました。会場の千葉大学に着くと、こんなにも多くの人が日本で保育について学び、研究に真剣に取り組んでいるのだということを感じて実感しました。

そのように始まった保育学会でしたが、たくさんの発表の中から何を聞こうかと思った時に、やはり、今自分が保育実践を体験している身として、それに関する発表に接してみたいと思いました。私は

今、公立幼稚園で非常勤講師として特別保育児の保育を担当しています。そこで、「口頭発表D(10) 障害児保育・障害のある子どもを含む保育3」の分科会を聴いてみようと思いました。その中で、最初に発表された芳野正昭さん(佐賀大学)の「障害幼児の気持ちに寄り添い自分で決めることを協力した保育実践―活動の切り換わりを促した場面から―」という発表に興味をもちました。

この研究に出てきた事例が、現場で保育をしている今の私にとって、とても啓発されるものでした。その事例とは、障害をもつ三歳児Rと保育者とのかわりを観察したもので、Rが好きな遊びから、お弁当を食べるということに気持ちを切り替えるという場面でした。保育者がRをお弁当に誘いに来るのですが、Rは最初のうちは遊びに没頭していて動きません。そこで、保育者がRの遊びに参加しながらタイミングを見ては誘い続けます。それによって、

Rが保育者の誘いを自分なりに受け止め、自分の意  
志でお弁当を食べることを選んだという事例でし  
た。芳野さんはこの事例から、Rはこの保育者のか  
わりの中で内的社会化を行って、そこにはR  
の自力に対する保育者の信頼があるとおっしゃって  
いました。

私はこの事例を聞いて、すぐに自分の保育と結び  
つけていました。私もその時、いつも一緒に過ごし  
ているMが、気持ちを切り替えるのが難しいことで  
悩んでいたからでしょう。Mが自分で気持ちを切り  
替えるのを待ちたいという思いをもちつつも、幼稚  
園の生活の中ではそこまで時間の余裕がないことも  
あり、私が無理矢理Mを連れて行くということがよ  
くあったのです。私は毎日その葛藤をもち続けてい  
ました。しかし、この事例を聞いて、私はとても前  
向きになれたような気がしたのです。「どんな状況  
であろうとも、やっぱり子どもの力を信頼するとい

うことを大切にしていけばいいのだ」と思えたから  
です。「子どもの力を信頼する」ということは保育  
者ならば誰もが大切にしていることでしょう。で  
も、そのような当たり前のことも、こうやって一つ  
の事例になることよって改めて考えさせられ、再  
確認できるのだと思いました。

たった一つの事例とはいえ、私にとっては救いと  
なる事例でした。私たちは日常の保育の中でさまざ  
まに葛藤し、いろいろなことを考えます。その中で  
発見するものもあれば、忘れてしまうものもありま  
す。しかし、実践を続けていくためには、何かの  
きっかけによって、それを考え直したり、取り戻し  
たりすることが必要です。私にとって今回の保育学  
会はその大切なきっかけでした。保育学会にはそん  
な大切なきっかけがきつとたくさん転がっているの  
だろうと思いました。

(安田・お茶の水女子大学大学院生)

# 園長のまなざし

## 第12回

### 日本の豊かな文化に触れる

木村 英美

「師走」の響きに慌ただしさを感ずる季節となりました。子どもたちが楽しみにしているクリスマスも、もうすぐです。そして、「もういくつ寝るとお正月」の歌を思わず口ずさんでいる先生たちもうれしそう。

大掃除でさっぱりと清められ、壁面に飾られた門松や注連飾り、鏡もちといった日本のお正月を迎える保育室のたたずまいに「気持ちがいい」「なんかきれい」と、子どもでも感じる凛とした雰囲気がいまいます。そして、その一つひとつに込められた願いや意味を知るにつれ、大きくなったことの喜びとたくましさ、子ども自身の顔つきに何となく表れるようになるから不思議です。

今は、いろいろな国の子どもたちが地域の幼稚園に通うことも増えました。それぞれの国の新しい年の迎え方について教えてもらえると、交際理解を進めるよい機会となるでしょう。

日本の文化は、四季に恵まれ、移り変わりを非常に大切にし、感謝して、自然と共に生きる自分たちの生





活の安泰を願ってきました。さまざまな生活の知恵があり、豊かな人生観が表れているといえます。今では伝統行事の多くが忘れられつつありますが、もう一度その原点にふれ、子どもたちに伝えていく役割が幼稚園にも求められていると思います。伝統行事、文化は受け手、伝え手がいなければ伝わっていきません。若い先生は、経験豊かな人生の先輩たちから学び、子どもたちに伝えていく機会にしてほしいと思います。

大人も子どもも「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と掛け声をかける中、湯気のたつたおいしそうなもちがつきあがり、ヒヨイと臼の中から顔を出しました。こぼれる笑顔が広がり、共にいられることの幸せを改めて感じる瞬間でした。

豊かで幸せな子ども時代を子どもたちに贈ることができるよう、日々の営みをていねいに支え続けていきたいです。

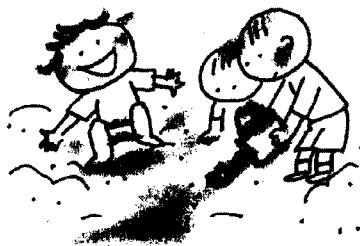
(港区立高輪幼稚園園長)

\*この連載は今回で終了いたします。

## 子ども文化の詩学 (6)

# 遊びつくすこと

森下みさ子



### ◆子どもにとっての「遊ぶ」

「子どもにとって遊ぶは大切だ」と誰もが言う。もちろん、大人にとっても遊ぶは大切であるに違いない。が、大切さの程度や意味は異なっている。遊べない子どもは気になるが、大人が上手に

遊べなくても、程よく休息をとって仕事や日常生活をこなしていれば、さほど問題にすることはない。つまり、子どもにとって遊ぶはヒトとして育っていくうえで必要不可欠なことだが、人間社会に位置づいた大人にとっては息抜きという意味において大切なのである。当然、遊びの中身や遊

び方も異なる。

学生たちに「今の遊び」と「子どものころの遊び」を挙げてもらうと、大人になった今はカラオケやショットピング、ケータイやファミレスでのおしゃべりなどが挙がってくるのに対して、子どものころの遊びといえば、かくれんぼ・鬼ごっこ・ままごと・〇〇ごっこ・積み木・どろんこ遊びなどである。ゲームも挙がってくるが、子ども時代のみならず、今もお遊んでいる場合が多い。対して、どろんこ遊びなどは、どろんこ祭りのような特別な場合を除けば、大人だけでどろんこ遊びをする人はいないだろう。むしろ、大人にとって「どろんこ」は避けたい嫌な状態に違いない。

しかし、幼児期の子どもたちにとっては本当に楽しい遊びである。型を抜いたり、泥団子を作ったり、山や川やトンネルを作っては壊して延々と遊んでいる。特に活気が満ちるのが、砂に水を混

ぜて、まさしく「どろんこ」状態になった時だ。

次々と水場からバケツやジョウロで運ばれてくる水によって砂場は一変する。水を吸い込んだ砂は黒く重たくなってまといついてくる。何かを作るには柔らかすぎる泥と化した砂場は、ただもう入り込んで、滑り込んで、泥だらけになって笑い合う場所となる。子どもたちの言葉にならない声の響きを聴いていると、どれだけ心が解き放たれているかわかる気がする。

小さい子どもたちの説明（連載第一回（本年二月号）で紹介した絵本『あなほほるもの おっこちるとこーちいちゃいこどもたちのせつめい』）によると「どろんこは、とびこんで、すべりこんで、おっこりんのしゃんしゃんつてするところ」なのだそうだ。この答えに、絵本作家であるセンダックは、首まで泥につかった子どもや、頭から足先まで泥まみれになった子どもを描いて応

えだが、まさしくどろんこ遊びの魅力は、心の芯までずっぽりと泥に入り込んで、泥と一体化することにあるだろう。泥と一体化する、このことが子どもを引き寄せ解き放ち、同時に、大人に嫌がられる根本原因となっている。とすれば、泥と一体化するどろんこ遊びの力とは何だろうか。

### ◆どろんこの力

どろんこ遊びがもたらす力を考えるにあたって、まずは私たち大人がなぜどろんこを嫌がるのか、改めて考えてみたい。何か特別な状況（お祭り、保育など）でもない限り、大人は泥が苦手である。できることなら触りたくないし、服にでもつけられたらとても困る。なぜだろうか？ たといえば、それが水だったら？ さらにその砂だったら？ あるいは固い土だったら？ 泥ほど嫌ではないに違いない。乾かしたり、払いのけたり、た

たいたりして取り除けるからだ。

泥が何より困るのは「くっついてとれない」うえに「さらにほかの部分にくっつく」からではないだろうか。まるで生命をもっているかのように、泥は「私」を侵食してくる。形の定まらないべったりしたものがくっついた途端、きちんとした服に包まれた「私」という個体の輪郭線が崩れ、「私」でいられないような不安定な状態を生み出してしまふ。

一方で、「私」の輪郭線を脅かす力や容易に他者とくっついてしまふ力とは、それだけ生き生きとした生命力や他者との一体感に結びつくものともいえるだろう。小さい子どもたちがどろんこ遊びの中で「感じとっている」のは、まさにこの大人の嫌悪感と表裏一体の生命力であり一体感であると思われる。大人が「秩序・分化・分類<sup>律</sup>」を価値として世界と向き合うのに対して、子どもは

「混沌・融即・共存<sup>註2</sup>」の面から世界に入り込んでいくといってもよいだろう。形を成さずにくっついては子どもたちをつなげてしまう泥の力は、原始的で根源的な体験をもたらすのだ。

前回（本年十月号）、おもちゃを使った遊びにおいて、自己とヒトとモノとが密にかかわることによって作られる「おもちゃの三角形」について考えてみたが、どろんこはこの関係をよりいっそう強めるものではないだろうか。何といっても泥には互いをくっつけてつなげてしまう力が備わっているからだ。最初は泥の中に入ることを持ちゅうちよしていた子どもも、いったん泥をつけられたり、つけたりしているうちに、泥が作り成す世界に入り込んで、それこそ「おっころりんのしゃんしゃん」としかいいようのない感覚を味わいつくす。むしろ、どうしても泥をいじれなかったり、どろんこの中に入れなかったりする子どもに対し

て、私たちは何か大切なものを忘れてきたかのような不安感すら覚える。

どろんこ遊びには、単なる健やかに遊ぶ子どものイメージのみならず、私たちが身体の奥底に刻みつけている貴重な体験の記憶が在るに違いない。自ら湧き出てくるエネルギーと他者のそれとがかかわって響きあう、その共鳴感こそが私たちの根っこでつながり、生命を支え合っているのではないだろうか。

#### ◆遊びの体験から

どろんこ遊びには臨界期がある。就学後ともなるとなかなか泥だらけになって遊ぶことはできない。子ども自身がどろんこに興味を失う場合も、大人が泥を使った遊びに、にわかに不寛容になることも含めて、どろんこ遊びの特権は幼児にのみ与えられているといえる。もちろん、どろんこ遊

びに限ったことではないが、幼児の一時期、子どもを魅了し、大人たちも記憶を介して積極的に是認する遊びには共通して、かかわり合うことによつて生命を感じ合い、支え合うという意味が潜在している。それは、決して文字で覚えたり頭で理解したりするようなことではない。身をもつて感じとつていくものである。

子どもにかかわるさまざまな事件が取りざたされる昨今、しきりに「生命の大切さを教える」ことが課題として挙げられる。小学生が被害者になるだけでなく、時には加害者になることもあり得る現在の状況を見ると、先生方がまなじりを決して「生命の大切さ」を教えようとするのもうなずける。しかし、標語のように言葉にして繰り返して唱えても、そのことの真意を心の底から得心することは難しいのではないだろうか。

いったい生命を大切にするとはどういうことな

のか。それに応えるためには、言葉や文字を介して教わるより以前に、自らの生命が大切にされていること、そのうえで他者の生命とつながり「気持ちよい」という共生感覚に浸ることが必要と思われる。すなわち、自他両方の生命を感じとることが求められるのだ。

理屈より手前で「感じとる」ことができるのが「幼児期」であり、その機会は「遊び」の中にこそある。どろんこ遊びの体験は、まさしく身をもつて生命を感じとる、いつときの体験であり、だからこそ、小さな子どもの遊びとして見守られてきたのだろう。

#### ◆子ども文化の詩的作用

幼児期に託されている子ども文化の意味は、まだ不安定な幼い生命が人間社会にヒトとしての居場所を見つけ、他者と共に在ることの幸福感を、

身をもって感じとつていくことにある。絵本やおもちやや伝承遊びやお菓子なども含めた子ども遊びすべてが、そのための通路となり、かけがえのない〈場〉となる。その〈場〉で子どもたちが体験していることは、どろんこ遊びに代表されるように、夢中になって遊ぶことで自分とヒトとモノとが「溶け合う」気持ちよさであるだろう。この包まれるような安心感、他者と共にある一体感、そしてヒトとモノとかわり合うことによつて噴出してくる生命の感知、これらがヒトがヒトとして人間社会で生きていく時の基盤となることは間違いない。

しかし、その成果は多くの場合、早急に明確な形となつて現れることはない。言葉の手前、あるいは言葉の誕生期に位置する、多義的で不定形な体験であるからこそ、目に見える効果を析出することはできないだろう。だからこそ、そこには大

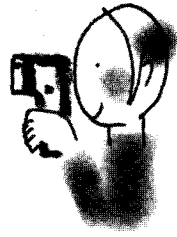
人の性急な解釈を拒む重要な意味が潜んでいるといえるのではないだろうか。そのことの意義は、「今ここで」（何かのためではなく）ひたすら遊びつくされる現場において、子どもたちの生き生きした様子から、私たちが「感じとる」しかないのである。私たち大人の身体の感受性の記憶において、子どもたちが感じとつている力と共振し、共鳴すること。意味よりも奥深いところで心を揺り動かす詩的作用にも似た体験が幼児の世界にはあり、また、あり続けることを願わずにはいられない。

（白百合女子大学文学部児童文化学科准教授）

注

- 1・2 本田和子著『子どもたちのいる宇宙』三省堂書店 一九八〇年より引用

\*この連載は今回で終了いたします。



保育の中の物語 (12)

「おにいさん」と

「おにいちゃん」

～小さいけれど、大きな問題～

岸井慶子

三年保育年中組。A男、B男、C男がままごとコーナーに入る。先程まで楽しんでいたスタンプやさんごっこの遊びを自分でおしまいしてきたのだ。みるからに小柄なA男に比べB男・C男は背が高い。そこへ、A男と同じように小柄なD男が入ってきた。

D男が戸棚の前にいるA男に小声で「僕がおにいさん。A君がおにいちゃんね」と二人の役割を決め始める。A男は不満そうな表情で黙っている。C男が二人の間に割り込むように「僕おとうさんね。僕おとうさんです」と二人ではなく遠くに向かって宣言し、「そうだ。Mちゃん、Mちゃん。おかあさんになって」と離れた所にいるM子に呼びかける。B男も「(僕も)おとうさん」と片手をあげて大きな声で宣言。B男とC男は顔を見合わせ交互に「お





とうさんです」「おとうさんです」を何度も繰り返す（ここではお父さんが二人いてもなんら問題にならない。むしろそのことを楽しんでる）。

一方、黙っていたA男が、動き始めたD男を追いかけるようにして、ついに「（僕が）お・い・い・さん、だよ」と強く言い返し、再び戸棚の前に移動する（お兄さんとお兄ちゃんのはつきり違うらしい）。D男はA男の後を追いついて「A君がおにいちゃん、僕がおにいさん」と、静かではあるが一貫した主張を続ける。A男は相変わらず不満そうにD男を見つめ黙っている。

二人のやり取りに気づいたB男が「あー。（D男に）おにいちゃん。（A男にも）おにいちゃん」とそれぞれを指さしながら命名する。A男の表情が曇る。

間髪入れず、今度は賑やかなC男がおどけた様子で「（D男に）おねえちゃん。（A男に）おにいちゃん」と指さしながら言う。A男は、頬を膨らませて怒ったような表情。D男は、何が起きたのかわからないような表情で相手の顔を見ている。すかさずC男が今度は「（D男に）おにいさん。（A男に）おにいちゃん。それで、僕おとうさん。おとうさん」とうれしそうに飛び跳ねながら言う（あんまり細かいことにこだわるなよ早く遊ぼう、とでも言うようだ）。

B男が、今度は相手の表情をのぞき込みながら、ゆつくりと「（D男に）おにい、ちゃん。（A男に）おにい、さん？」と確かめながら言う。A男は、うれしそうなお表情で、大きく二度ほどうなずき、背筋を伸ばしてぴよんと飛び上が



る。「おにいちゃん」にされたD男は、不満そうな表情で両腕を後ろに組み、すぐにその輪から離れる。四人で固まって話し合っていたのが、今度は三人対一人になった。B男「おにいさんのほうが背が高いんだよ」C男「知ってる?」、D男「もちろん知ってるよ」おにいさんのほうが背が高いんだよ」と片手を床に、もう一方の手を頭の上方に伸ばす。B男「そう。おにいちゃんのほうが背が、ちょっと、低いんだよね」と手振りで示しながら説明する。D男「じゃあ比べてみよつか」と戸棚の出っ張りに腰かけている(少し位置が高くなる)A男を抱きかかえて床面に降ろそうする。するとA男は両腕を突っ張って戸棚にしがみつき「く、ら、べ、ない」とひと言、大きな声で拒否。

A男の気持ちを察したのだろうか、B男が「じゃあ、B君(自分のこと)と比べてみよう」とD男の隣に並ぶ。C男が「B君のほうが(D君より)高い。それよりCちゃん(自分のこと)のほうが、高い」とうれしそうに自分も含めて比べる(D男はなぜB男やC男との背比べを喜ぶのかしら)。

今度は、C男がA男を柵から強引に降ろし、D男と二人を並べる。B男が見比べ「あー、おんなじくらいだよ」。するとD男「いえーい。おんなじくらい。おんなじくらい。おんなじくらい」と片手を上にあげ喜ぶ(なぜ「同じくらい」がうれしいの?)。

ひと呼吸おいて、B男が「だけど、ちょっと、A君のほうが高い」と言い、



「ねっ」とA男の顔をのぞき込む(D男にもA男にも配慮しているのだろうか)。するとD男「違うよ。僕のほうが高いよ」、B男「えっ、違うよ。A君のほうが高いよ」、D男「だってさ。A君はここに(A男の腰かけている棚を手でなでながら)」と言い、再びA男を抱きかかえるようにやや強引に床に降ろす。渋谷背比べをさせられたA男だが、(足元をみるとびっくり)最大限のつま先立ちをしている(なんとけなげではないか)。そうとは知らないD男は自分の手でA男と自分の頭の位置を比べ、自分のほうが低い(実際は同じくらいなのだ)、D男が頭を斜めになっているので)と思ったのか、なんとなくその場はそれでおしまいになった。このあと、「ちゃん・さん」問題はすつきりとした納得に至らず、遊びの中で何度か再燃する。その都度、取っ組み合いや、おどけがでてきては雰囲気を変え、驚くほど遊びは続いた。

このエピソードは、その長く楽しい物語のほんの一部の出来事だ。そして私にとって一番わかりにくい部分だ。見直すたびに解釈が変わる。不可解な部分に重要な意味が隠されていること、そして小さな問題(と思われること)が、子どもにとって大きな問題でもあること、を学ばせてもらった。観察者にとってわかりやすいことばかり追ってはいはだめだなあ、と反省させられた。

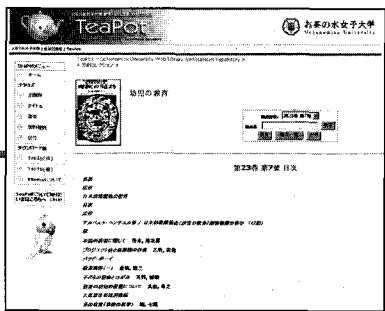
(鎌倉女子大学短期大学教授)

\*この連載は今回で終了いたします。

## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (12)

# 倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たちの 実践研究の歩み

立浪澄子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション (略称 TeaPot)」にてバックナンバーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

保育の方法に関する研究は、まず保育者の観察による疑問や、何となく体感する違和感から発するように思います。その疑問や違和感をそのままにせず「何だろう」とこたわり、それを言葉にしてほかの人と共有したり討論したりすることで、思わぬ発見をすることがあります。その結果、全く別の事柄と結びついたり、自分の中で突然目の前が開ける思いがしたりすることも少なくありません。

ですから、実践研究では共同研究こそ最も大切なものであると考えられますが、その先達として著名なのは、倉橋惣三と女高師（東京女子高等師範学校）附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園。以下、附属幼稚園と略）の保母（戦前、幼稚園教諭は幼稚園保母と呼ばれていました）たちの作業です。

### ▼倉橋惣三と女高師附属幼稚園の共同研究

倉橋惣三は一九一七（大正六）年から一九四九（昭

和二十四)年までに三度、合わせれば二十年以上にわたって、附属幼稚園の主事(園長)を務めました。

このことは、倉橋の理論形成の過程で、とても大きな意味をもっているのではないでしょうか。なぜなら、倉橋の理論は、外国の文献の翻訳や当時流行した哲学的思弁からというよりも、常に幼児の元気な声や足音が響き渡る環境の中で、つい先程幼児を送り出した人々との語らいを重ねる中から生まれてきたといえるからです。それは彼自身の言によっても知ることができます。

「幼稚園に関する私の研究は、すべて東京女子師範学校の附属幼稚園において、考えつつ行いつつ、行いつつ考えつつ進められて来た。従って、いつでも同僚保母諸君の助けを借りている。助けを借りたというよりも、共同研究で歩いて来たといった方がほんとうである」<sup>※</sup>

『幼児の教育』の中からその記録を読み進めていくと、

初めのころは、附属幼稚園の保母たちも決して倉橋の論のとおり保育を進めていたわけではないことがわかります。しかし、保母たちは、自身が日々の保育の中で気づいたり、試みたりしたことを倉橋とのやりとりの中で咀嚼し、反芻し、その経験を通して倉橋の論を自らも体感していったのではないのでしょうか。その結果として保母自らが新しい活動スタイルを芽生えさせていったのだと私は考えています。

そして倉橋もまた、保母の話聞きながら、自分の考えを咀嚼し、反芻し、再確認し、方向性を明確にしていったのではないかと考えています。

広い視野と学問的素養をもった研究者と、実際に子どもと出会う保母がそれぞれの立場を生かしながら、互いの経験や知識を自在に絡み合わせつつ、一つの独自の実践方法を編み出していった、それが昭和初期の附属幼稚園の姿であり、その姿は折々の『幼児の教育』にしっかりと残されています。

## ▼「座談会」を重ねる中で

倉橋と保母たちとの共同研究の生成の姿を、以下に見ていきましょう。

一九二九（昭和四）年の第二九巻第七号に「保育座談会」という記事が初めてです。出席者は倉橋、堀七蔵（一時期、附属幼稚園主事）、そして及川、新庄、神原、徳久、白根、澤、当時の附属幼稚園の保母たちです。

この時の題材は、ずばり「幼児の仕事の際における保母の態度並びに、もし保母の力を加うべき場合如何程度の程度に力を添えていいでしょうか（31頁）」です。ずいぶん長い題名ではありますが、現場保育者ならば、誰にとつても切実な問題でしょう。このような題材の設定の仕方には、現場の問題、保母自身の問題を、まさに「研究課題」として取り上げていこうとする倉橋の面目躍如たるものがあります。

座談会はこの後もさまざまな題材を取り上げ続いていきます<sup>注2</sup>。しかしその記録を読む限り、初めのころは、主役は倉橋と堀であり、終始二人のやりとりがメインになっていきます。保母たちは常に問題設定か話題提供の役割しか果たしていません。時折発する意見もほとんどは「何々の場合はどうしたらよろしいでしょう」というような疑問形が目立ちます。堀の「いったい、遊戯の教育価値は何なの」という質問に、新庄保母はまだ「分からないんですよ。こつちが伺いたい所ですわ」と答えています<sup>注3</sup>。

ようやく後半「問題の子供について」あたりから、保母たちの舌がなめらかになり、発言者も特定の人だけではなくなってきました。会を重ねるうちに、自分たちにとつて最も身近な問題を、倉橋が具体的に、かつさまざまな視点からとらえ、方向を示してくれることで信頼関係を深めていった様子が感じられます。ただ、これには倉橋が一九三〇（昭和五）年十二月、

再び附属幼稚園の主事になったことも大きく影響していると思います。

### ▼保育日誌を『幼児の教育』誌上に紹介する

次に私が注目し、今回この稿でぜひとも紹介したいのが「五月の一週間」という保育日誌です。「東京女子師範学校附属幼稚園に於ける保育の実際」と副題がついています。一九三二（昭和七）年、『幼児の教育』第三十二巻第六号に掲載されました。時期的に見て、おそらく同年五月二十三日（月）から二十八日（土）までの六日間の全六クラス（四、五歳児）の保育日誌がすぐさま掲載されたものと思われます。

当時の附属幼稚園の担任保育母によって書かれたもので、文体や構成もそれぞれでありながら、いずれの記録もその日のクラスの保育の風景を彷彿とさせるものです。

倉橋はなぜ保育日誌を『幼児の教育』誌上に掲載し

たのでしょうか。その「はしがき」で、彼は次のように述べています。

「幼稚園は生きている。その生きているところを、ありのままに、なまなましく記しとめたのが、之等の日誌である。（中略）その中に、私たちが平生活しあっている考え方や、心もちが、全局的に、又部分的に、おのづから実現せられているものに相違ない（2頁）」

保育案（現代風にいえば教育課程）は昔も今も、紙に書かれた「事前」の「計画」としてイメージされやすいのですが、倉橋は、事前の計画を保育母の計算や準備に具体化し、「幼児の生活を、生活としての自由と必然とに生かしてゆく（同3頁）」実践を何よりも重視していました。従って、彼にとって保育日誌とは、事後の記録として、まさに「生きた保育」をとらえるためになくはならないものだったのでしょう。だか

らこそ、彼は保育案以前に保育日誌を公表したのではないでしようか。

#### ▼四歳児、五月の一週間

では、実際の日誌を見てみましょう。ここでは、年少児（四歳児）神原キク保育の「川の組」を取り上げてみます。

五月二十五日（水）、お漏らしをする子が出ます。これで三度目。「注意をしたら、今日は、しよげていた。分つて来たんじゃないかしら」（同31頁）と思う神原保母は子どもの表情をよく見ています。

これは神原保母だけではありません。海の組（五歳児クラス）担任の菊池フジノ保母は、五月二十四日（火）の日誌の中で、こう述べています。

「子供達の眼は一樣にそちらを向いた。そして『僕達も何か』といった様の表情がかすかに動いた（同

6頁）」

この「かすかな動き」を瞬時に見てとったのはさすがだと思えます。菊池保母はそこから元々この日予定していた自由画の指導に進んでいくのです。

言葉での表現が未熟な幼児の思いをとらえるには、その表情や「お漏らし」など行動による表現を見逃さないことが保育者には求められます。附属幼稚園の保母たちはこのような細やかな観察から、子どもが求めているものを自ら感じ取って保育案に具体化していったのではないでしようか。

また、神原保母は、初め汽車ごっこを中心はこの週の遊びを心積もりしていたようですが、四歳の一学期ではなかなかそこまでいきませんでした。ある程度予想はしていたものの、日誌を通して改めてそのことが確認されたのです。

このような経験がおそらくは生かされたのでしよう、「系統的保育案の実際」<sup>注4</sup>（一九三五）には、四歳児の初めごろは誘導保育案の計画がありません。このよう



な点からも、倉橋の理論には附属幼稚園保母の経験が色濃く反映されていることがわかります。

どんなに周到な計画を立てても、保育は「生きてい  
る」ものですから、思わぬ展開がいつでも起こり得ま  
す。だからこそ、どのように予想が食い違ったのか、  
なぜそのような事態が起こったのか、その時の対応は  
あれでよかったのか、もし問題があったとしたらどう  
すればよかったのか、いろいろな思いが保育終了後に  
沸きあがってきます。それを書き留め、次の実践に生  
かしていく、そうやってこそ初めて、今日の実践が明  
日の実践へつながり、カリキュラム編成の足がかりと  
なります。

倉橋と附属幼稚園の保母たちは、このような「実践  
からカリキュラムへ」というカリキュラム編成の道筋  
を共同でつくりだしていったのです。『幼児の教育』  
誌の中に残されたその足跡は、日本の保育界の財産だ  
と思います。

(長野県短期大学)

注

1 倉橋惣三文庫1「幼稚園真諦」フレイベル館二〇〇八年

5頁(原題は「幼稚園保育法真諦」一九三四年出版)

2 「ぬり絵 きり紙」(第二九卷第十号)

「粘土」(第二九卷第十一号)

「木工・きびがら細工・豆細工・摺紙・織紙」

(第二九卷第十二号)

「談話について」(第三十卷第一号)

「ストーブを囲んで―遊戯についての話―」

(第三十卷第二号)

「遊戯唱歌について」(第三十卷第五号)

「観察について」(第三十卷第十号)

「問題の子供について」(第三十卷第十一号)

「低学年幼稚園座談会」(第三十一卷第五号)

「仲間にはいない子、仲間にはいない子」

(第三十一卷第十二号)

「い、子を語る」(第三十二卷第一号)

3 「ストーブを囲んで―遊戯についてのはなし―」

(第三十卷第二号 32頁)

4 東京女子高等師範学校附属幼稚園編

日本幼稚園協会発行 一九三五年

保育の現場から

雪に暮らし、

雪と遊ぶ子どもたち

伊藤克実



冬の訪れ

園庭の白樺の木々の葉が冷たい風に舞い散るころ、札幌にそろそろ冬が訪れます。早い年で十月下旬には初雪を見ますが、気候変動のためか、最近はなかなか予測がたちません。初雪は一度融けますが、その時期を境に冷たい雨やみぞれが降る荒れた天気が続き、本格的な冬を迎えます。何度かの降雪の後、根雪となつて札幌は春まで雪の中の生活となります。

その期間は約五か月になるほどの長さです。札幌の子どもたちは雪と暮らし、雪に親しみながら成長していると言つていいかもしれません。

雪は自然の恵みでもあります。約百九十万を超える札幌市民の水源地は、周囲の山々に堆積した雪の雪解け水ですから、本当に貴重な資源です。しかし、一方で、わずか一晩に降り積もつた雪でも、現代の特徴である車社会の機能をマヒさせるに十分な威力を発揮することがあります。このように札幌という都会の中で

生活するうえで、雪が支障を生むことが多いのも事実です。

## 雪への備え

雪が降り積もるころ、保育園に通う子どもたちの様相は一変します。二歳になったM君は登園してくる友達の内、真つ赤な耳やほっぺを見て、「寒かった？（ぼくの）手、あつたかいよ」と声をかけていました。季節の変化を敏感に感じとって、子どもたちは言葉を行き交えます。車での登園が多い昨今ですが、Kさんはいつもソリに二人の子どもを乗せて、顔を真つ赤にして引つ張ってきました。保育園そばにある公園の雪を踏みしめながら登園する姿に、母親のたくましさを感じられました。

雪が降ると、保育園生活の必需品は一気に増えます。子どもたちは分厚いスノーウェア（防寒着）を身にまとい、足元は長靴や防寒靴と脚絆きんぱん、そして毛糸の帽子と手袋が必需品です。全部身にまとった子どもた

ちは、まるで宇宙飛行士のような着ぶくれ状態になり、雪道を散歩に出かけていきます。長い冬の期間に何度も気温が変動します。暖気で緩んだ雪道は、次の日の寒気でいっぺんにスケート場のようにツルツルとなり、転びそうになりながらの散歩です。寒くても暖かくても、散歩から帰ってきた子どもたちのスノーウェアは当然濡れていますから、玄關脇の乾燥室には何人もの子どもたちの服がぶら下がっています。これが冬の風物詩です。

## 除雪機、大好き

ひと冬に何度か「ドカ雪」が降りますが、どんな大雪でも避難路は確保しなければなりません。子どもたちの逃げ道を除雪するのが園長の日課です。

当保育園の園庭に面して乳児から二歳児のクラスが並んでいます。そのクラスに沿って、避難路となる道幅を除雪機で除雪するのですが、その様子を窓越しに子どもたちは見えています。子どもたちは雪跳ねを見る

のがとても大好きです。乳児クラスの子どもたちは、除雪機のエンジン音が「ポツ、ポツ、ポツ」と聞こえてくると、窓際に寄ってきて保育者の膝の間にちょこんと座って見ていたり、雪が吹き上がって園庭に散る様子をつかまり立ちで見守ってくれたりします。一歳児のクラスでは、窓際に子どもたちが集まり、「園長先生、がんばって」の保育者のエールに声をそろえてくれることもあります。

降雪量が増すと、町内各所で雪が堆積し始めます。除・排雪した雪は随所に山となり、道路はしだいに狭まってきます。このため、二月中ごろに、町内全体で除雪大作戦が行われます。二日がかりの除雪大作戦は大型の除雪車で道路の雪を根こそぎ取っていくほどの迫力で、そのはぎ取った雪を積んだトラックが何どもたちはフェンスにしがみついて、その様子を見るのが大好き。そして見終わると、スコップとバケツを持ってきて「雪のお仕事なの」と雪運びや雪を掘るの

に懸命な子どもたちです。

### 雪を感じる子どもたち

雪は子どもたちにいろいろな感覚を与えてくれるようです。年に何度かある大雪の時、雪は煙るように静かに、そして間断なく降り続きます。そうすると街はなぜか無音の世界となってしまいます。園舎内の窓から、保育者と子どもたちが空から落ちてくる雪の流れを見ていて、「すごいね、今日は早くお迎えにくるかもね」と話しています。吹雪の日は、雪の量もさることながら、大きなうねるような音が、子どもを少しばかり、不安にします。しかし、風がいつしか止み、雲間から青空が見え始めると、子どもたちに笑みが戻ります。積もったばかりの雪はフワフワです。子ども足ではとても踏むことができないくらい厚く積もった雪は、真綿のようです。この雪の上にゴロンと転がって手足を伸ばし、とても気持ちよさそうな子どもたちです。また湿り気のない雪はサラサラな感

じ。あらればバラバラ。

雪は保育者の言葉を介して、子どもたちの中に音をもつものとして、イメージされていきます。また暖気の日が重なると、雪はしだいに融け始め、園庭の土が顔をのぞかせます。そんな時は子どもたちのお尻は土で真つ黒に汚れてしまいます。そして、また雪が降つて積もり、手がかじかむほどの寒い日々が続くと、雪はしつかりと固くなります。子どもの手でスコップを使って雪穴を掘ろうとしても、齒が立たないことを子どもたちはすぐにわかります。このように子どもは外の世界の変化を敏感に感じとり、雪の性質と寒暖の差を身体で覚えるのです。

### ドンドト焼き

ドンドト焼きは正月十四日に家の正月飾りや絵馬を持ち寄つて焼き、その年の無病息災を祈つたという日本各地に伝承されてきた伝統行事です。当保育園でも一月中旬に、各家庭からお正月飾りなどを持ってきてもら

い、園庭で行います。園庭の中心に直径2m、深さ50cmくらいの雪の穴を掘つて、お飾りやお札を焼きまします。穴の周りを子どもたち全員が取り囲んで、飾りやお札が燃えて立ち上がる煙を身体に引き寄せ、今年の健康を祈願します。また煙を頭にかけると賢くなるといふ言い伝えがあり、子どもたちに声をかけると、両手でパタパタと頭のほうへ煙をかけています。間もなく小学校に進む子どもたちへはみんながかけ、賢くなるようにと声かけて励まします。

### 雪と遊ぶーソリ滑り

北国の子どもたちの遊びの第一に挙げられるのは、ソリ遊びです。当保育園でも、子どもたちの年齢に応じたソリ遊びが行われています。

一歳児クラスの子どもたちはソリを引っ張るのが大好き。ソリに氷や雪玉で作ったおにぎりをたくさん乗せて園庭内をお散歩します。また、自分たちより小さな乳児の子どもを乗せて「うんこらしょ」と引っ張つ

て得意げです。四歳児の子どもたちは、近くの公園に降り積もって足跡のない雪の上を、全員で踏み固めて築山にたどり着き、山の上から米袋で作ったソリで滑り降りることに挑戦します。ソリはプラスチック製のソリだけでなく、ビニール製の米袋にダンボールを四角に切って入れて作った手製のソリを作って遊びます。また三歳児クラスの子どもたちは、築山から青いビニールシートの上に乗って滑り降りるのが大好きです。ゴミ袋もソリ代わりになりますし、スノーウエアのまま滑る尻滑りもよくする遊びです。

保育園の近隣だけでなく、年長の子どもたちは、保育園から歩いて二十分ほどの公園に手製のソリを持って滑りに何度も出かけます。公園は全体が大きな山となっていて、近隣の小学校のスキー学習が行われる所です。スキー学習の時は山の片側を使ってソリ滑りをして遊びます。山にはところどころに突き出た所もあって、そこをソリで滑り下りるスピード感とスリルが子どもたちには楽しいことです。

## 色水遊び

夏に絵の具を溶かした色水遊びをしますが、これを雪の上でもすることがあります。園庭の雪は赤や黄色、青色などに彩られてとてもきれいなものです。二歳児の子どもたちが、絵の具を溶かして作った色水をまいて遊んだ時のことです。一歳児の子どもたちが「い、れ、て」って言ってきたので一緒に遊びました。赤や黄色になった雪をスコップでバケツに入れて「りんごだよ」「みかんですよ、たべて」と見せてくれました。

## 雪中運動会

札幌の冬のイベント「雪祭り」の時期に、保育園ではミニ運動会を開催しています。保育園のそばの公園の雪を年長組の子どもたちが踏み固めて会場作りです。乳児の子どもたちを年長の子どもたちがソリに乗せて引きながらのかけっこや、ボールを雪の中から拾い、バケツを持って逃げ回る保育者を追いかけてその

バケツに入れるゲームなど、毎年保育者が知恵をしぼって競技を考えます。乳児の子どもたちは早く保育園に戻りますが、残った子どもたちは声援を送りながら最後まで参加しています。終わった後はみんなで甘茶を飲んだり、ココアを飲んだりします。

## 冬の動物園

卒園式を終えた子どもたちは最後の行事として円山動物園に出かけます。冬の動物園は人影もまばらで貸し切り状態です。地下鉄に乗って、歩いて三十分ほどで到着。暖かな国に住んでいる動物たちは、ほとんどが飼育舎の中から見るができます。むっとした生暖かな園内に入ると子どもたちは鼻を押さえて、顔をしかめます。夏では体験できない世界です。

## 雪と共に生きる子どもたち

北国を雪に閉じ込められたという感覚でとらえると、その暮らしぶりや子どもたちの遊びがもつ豊かさ

をイメージすることは難しいかもしれません。確かに雪は生活をするうえで支障となることが多いといえます。冬タイヤで走る車が往来する横断歩道は、小さいころに遊んだ雪玉割りの雪玉ほどにツルツルで、何人もの人が転倒して病院に搬送されます。木や石炭で暖をとった時代は石油や電気に代わり、昔の子どもたちが体験した石炭運びの手伝いは姿を消しました。スイッチを入れると部屋が暖かくなるという体験は、子どもの世界から何か大事なものを喪失させているように思えます。でも、寒い中お母さんと連れだつて登園する子どもたちや、雪にまみれて手袋や帽子にびっしりと雪を付けて、頭からゆげがでるほど遊んできて保育園に戻ってくる子どもたちを見ると、子どもたちが雪という自然と共生する柔らかなたくましさに共感を覚えます。雪を単に邪魔なものとして排除するのではなく、生活の中で雪を受け止めて生きる構えが、この小さな子どもたちに宿されていることを思います。

(札幌 大谷地たかだ保育園園長)

## さまざまな現場にある保育者の共同省察

— 「保育土曜ゼミ」という場が形成するもの —

佐治由美子

猪本 こそ

### 「保育土曜ゼミ」の成り立ち

お茶の水女子大学の幼保プロジェクト<sup>注1</sup>では、二年目にあたる二〇〇七年度からいくつかの自主ゼミが始められた。それは、プロジェクト・メンバーと学部生や院生との間にある、保育をめぐる関心領域を自主ゼミの形でつないでいくための試みであったが、実際に始めてみると、本学の学生だけでなく他大学の学生や、保育現場にある方々、研究者の方々が次々に参加してくださり、継続されていった。ここでは、その自主ゼ

ミの一つである「保育土曜ゼミ」について報告したい。

このゼミは、二〇〇七年秋、私（佐治）が主任を兼務していたお茶の水女子大学附属いずみナーサリーのある保育士から、他の現場の方と一緒に勉強する場をつくってほしいとの願いを受け、スタートしたものである。多様な保育の場にある方々が一同に会して保育を学ぶのにふさわしいテキストとは……。私の頭に真っ先に浮かんだのは、津守真先生の「保育者の地平」<sup>注2</sup>であった。

身近な保育の場に声をかけ集まってくださったの



は、保育園二園、幼稚園（未就園児クラス担当者を含む）五園、特別支援学校一校の職員の皆さんだった。

常勤・非常勤のバランスを見ていくと、一対二の割合で非常勤の方が圧倒的に多い。これは、非常勤で保育にかかわる方々に、安定的な学びの場が用意されにくいことを物語っているように思われる。

ゼミの進め方は、テキストの一章ずつをいねいに読むこととし、毎回保育体験と重ねた読後感を自由にレポートしていただき、それに沿ってみんなで語り合うという形式をとった。

こうして月一回のペースでゼミを続けていく中で、気づいたことがいくつもある。その一つは、参加者がそれぞれの保育を語るのに、乳児保育や幼児保育、就園前の子育て支援的な保育、さらには特別支援学校の教育まで、さまざまな取り組みがいつべんに組上に上るような話し合いになる。が、いつもその立ち位置の違いについて語り合うような議論にはなっていないのである。参加者のまなざしが、今ここに生きる子ども

もと保育者のその営みを通して、変わらざる示される保育の原理を求めているからであろうか。それは、幼と保の別を超え、また特別支援の枠も超えて、子どもを見つめてこられた津守先生の保育理論の広さと深さが、参加者に浸透しているからであるように思う。

またもう一つは、ゼミの開始時点では読後感を語り合うことだけを考えていたが、日を重ねるうちにお互いの保育を共同で省察する場へと発展してきているように思う。保育の省察は、決まった型が先にあるのではなく、実践者それぞれに取り組みやすい形が模索されていくことこそ重要なかもしれない。

以下に、ゼミの一員である猪本さんの一文を紹介する。猪本さんは、土曜ゼミの中で津守先生の『いま』を充実させる』と倉橋惣三先生の『自己充実』の二つの「充実」を並べて考えたことをきっかけに、経験一年目の保育を次のように振り返ってくださった。

佐治由美子

（お茶の水女子大学・幼保プロジェクト専任講師）

## 「保育士躍ゼミ」をきっかけに

「こわい、こわい」

今日もうんていの上で四つん這いになって立ち往生するK夫が私を呼んでいる。私は慣れたように近づいて「よいしょっ」と抱きかかえてうんていから降ろす。

K夫は「テヘッ」と笑う。こんなことを毎日のように繰り返した。

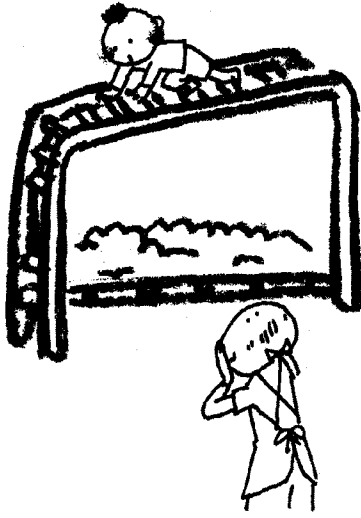
わが幼稚園部のうんていは少々曲者なのだ。片方のはしごからは登っていけるものの、地面に平行になっていくうえ、もう一方ははしごになっていないために、器用の上でUターンしなければ地上には戻ってこれないのである。そのため、年少児が使いこなすのは難しく、「うんていは先生と一緒にやろうね」というルールのもと、小さな子どもたちも果敢にチャレンジしていた。そんな中、保育者の目を盗んで不敵な笑みを浮かべながら、こっそりとやるのがK夫だった。抱かれて降りた後の「テヘッ」の理由はここにあった。

K夫は入園当初から、集まりの時間にはみんなの輪から抜けて猛スピードで部屋を飛び出していき、「まっつー」と追いかける保育者との追いかけっこを幾度となく楽しんだ。楽しそうに大笑いしながら逃げるK夫につられるように、ほかの人も走り出した。担任になって一か月も経たない私は、あっちへこっちへと追いかけていきながら「どうしたらいいのやら……」と頭を抱えなくなるような日々だった。

そんなK夫も、「こわい」と言って身動きがとれなくなるうんていの上から降りる時にはスツと抱かれてくれた。それがうれしくもあった。

一学期も終わりに近づいた七月のある日、砂場で団子を作っていると、うんていでいつものごとく立ち往生するK夫の姿が目に入った。「こわい、こわい」と言っている。それはわかったものの、私の横には今日初めて友達と一緒に砂場で手を汚してお団子を作っているA子がいた。私がここを離れたら、きつとA子もついてきてしまうだろう。K夫には少し待ってもらお

う！ 中腰になった体だけは和やかなお団子屋さんの場にありながら、私の気持ちの全ては危機的状況のK夫に注がれていた。その時、年中組の担任U先生がK夫の様子に気づき、近づいていってくれたのが見えだ。『よかった。U先生がK夫を抱いて降ろしてくれるんだ』そう思って、私はほっとした。そして、ようやく団子を作るA子たちに気持ちを戻した。そして、またふと、うんていの方を見ると、まだうんていの上にいるK夫と、その傍らでK夫を見守るU先生がいた。



どうやら「頑張つてごらん！」と声をかけてくれている様子。そして、K夫も真剣な顔つきで、恐る恐る手と足を前に進めている。ようやく端まで到達したところで、U先生がK夫をスッと抱きかかえ、下に降ろした。地に足がついたとたん、スキップともジャンプとも駆け足ともいえないような足取りで、私の所までやってきたK夫は、「できたよ！ やったー！ ああ やって、上からずーっとやったんだよ！」と報告してくれた。

『そうだったのか』私はこんなにも喜びに満ちたK夫を前にして、どこか晴れない気持ちになった。「こわい、こわい」というK夫を抱いて降ろすことを何度となく繰り返す中で、一度も「もう少しだよ！ 頑張つてごらん」と声をかけたことはなかった。『きつと、私の横にA子がいなければ、今日も私はK夫を抱いて降ろしていただろう。それなら、これほど自信に満ちて体を弾ませるK夫の姿はなかったんだ』そう思うと、K夫への申し訳なさや、自分の力不足を痛感して

の恥ずかしさ、でも今、目の前で喜びに満ちているK夫がいるという事実への安堵感、いろいろな気持ちが入り混じったような感情が一気に押し寄せてきた。

この度、倉橋惣三先生の『幼稚園真諦<sup>註</sup>』の中に出てくる子どもの「自己充実」そして、「相手の内部に即して」行われる保育者による「充実指導」について考える機会があった。そこで一番に思い浮かんだのが、うんていにまつわるK夫とのこの場面であった。あの時、私はK夫の「今」の充実を大切にしていただろうか。「こわい」と言うK夫を抱いて降ろすという「K夫への手の貸し方」を安易に作り上げていなかっただろうか。普段のK夫とのつかめそうでつかめない関係性を、抱いて降ろすということではつかめたような気になつて満足していなかっただろうか。抱いて降ろしていたことが恥ずかしかったのでも、申し訳なかったのでもない。私がK夫の「今」の充実を助けることを考えることなく、断片的なかかわりをしていたこと、新

たな一步を踏み出そうとする気持ちが込められた「こわい」を受け止められなかったことが申し訳なくて恥ずかしかったのだ。そのことに気がついた。

子どもの自己充実をどのように支えていくか。助けていくか。それに正解はないだろう。なぜなら、それは目の前にいる子どもと保育者との相互のやりとりの中で常に揺れ動きながら生まれていくものだからである。

しかし、どうしても、揺れ動く中で見えてくるだろう次の一步が待てず、焦りを前面に出した一方的なかわりになつてしまうことがある。それは、目の前の子どもとの「今」にどっぷりと自分を費やす勇気もてないからである。K夫ともかかわりの時もそうだったように、K夫の「今」に寄り添うことでほかの子ども「今」を逃がしてしまうような気持ちになるからである。そのような時、結局はどの子どもとの「今」のやりとりも楽しめておらず、また、それぞれの子どもが

向かおうとしている先も明確に見えてこないのである。そして、そんな時に流れるのは「保育者と子ども」

「保育する者とされる者」という、立場の異なる二者関係が浮き彫りになったような味気ない時間である。

子どもにとっては当然、居心地のよい時間とは言えないだろう。しかし、そんな保育者を前にしても子どもは文句を言うこともなく、その保育は成り立っているかのように思えてしまう。そして、保育を振り返りながらようやく、そのずれに気づかされるのである。

保育者が一人ひとりの子どもとの「今」を充実させるために心も体も没頭するかかわりを繰り返す時、その先で子どもが自己充実を成し遂げ、喜び、目を輝かせ、体を弾ませる姿を見ることができれば、その保育者にとつてはこの上ない喜びが生まれることになるだろう。それは、保育者が相手に即して内部に入り込み、共に試行錯誤した体験がその喜びの源になっているからではないだろうか。このように、保育者自身が

子どもとの「今」を楽しみ、充実した時間を過ごす時、その姿は大人特有の強い力を示すことにはならないだろう。大人が子どもの気持ちになつて子どもの内側の世界に入つていくならば、むしろ誰の目にも目立たないかわりになるように思われる。

子どもと私（保育者）との充実した「今」を積み重ねていくその先に、自然と生まれてくるのが子どもとの「今」の充実なのだろう。その充実の「今」が必ずやってくることを信じて、子どもとの「今」を大切にできる保育者でありたい。そう願う気持ちは胸にありつつ、その難しさとの闘いは、まだまだ、まだまだ、続きそうな気がしている。

（鎌倉女子大学幼稚部教諭）

猪本こを

#### 注

- 五歳の発達を見通した保育者養成カリキュラムの創造をめざす「幼・保・大」連携研究プロジェクトをさす
- 津守真著「保育者の地平」ミネルヴァ書房 一九九七年
- 倉橋惣三著「幼稚園真諦」フレールベル館 二〇〇八年

# 幼児の教育 第一〇八卷(平成二十一年) 総目録

## ◇第一号

巻頭言「友達と一緒」の再考 神長美津子  
特集 子どもと新年

昆布巻きの話

立川多恵子

しあわせの記憶

すとうあさえ

昔遊びを楽しむお正月

私市和子

時の結び目ということ

鈴木禎宏

園長のまなざし(1)

冬空をのぼるあなたへ

向山陽子

保育の中の物語(1)

岸井慶子

観察のまど 子どものにわ(1)

砂上史子

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(1)

『幼児の教育』のネット公開と

幼児教育史研究の可能性 湯川嘉津美

アキオとネーネと石

古賀松香

保育の現場から

五歳児の三学期

上坂元絵里

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携

保育研究の試み(Ⅷ) ミュンヘン市の

幼保をつなぐ実践 浜口順子

## ◇第二号

巻頭言

引き受ける父親

井原成男

こども文化の詩学(1)

森下みさ子

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(2)

『幼児の教育』誌にみる幼児期の

科学教育に関する記事

瀧川光治

園長のまなざし(2)

粘土作品の陰に感動あり

菊地妙子

「言葉にできない知」を伝えること

保育の中の物語(2)

川口陽徳

隠岐島便り(4)

岸井慶子

ひと針ひと針

田内英理子

上海で東京 子育てメール便(7)

発達心理学者の子育て奮戦記(6)

赤ちゃん返り

長田瑞恵

保育の現場から

心弾む日々を重ねて

阿蘇亜希

## ◇第三号

巻頭言 ある幼稚園と小学校の交流活動

から学んだこと 河邊貴子

特集 子どもと春

Y君のいない卒園式

江波諄子

わが子の春

石動瑞代

幼稚園の春

安部富士男

一年生に教えてもらったこと 渡辺敏

園長のまなざし(3)

アットホームな保育園

高橋悦子

保育の中の物語(3)

岸井慶子

観察のまど 子どものにわ(2) 砂上史子

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(3)

『幼児の教育』をネットで読む

キーワード「遊び」から出合った記事

横井紘子

韓国の障害児保育について 金允貞

保育の現場から 「みんなの中の私」と

いうこと 伊集院理子

「幼・保・大」連携(Ⅶ) アメリカ合衆国

の保育事情・保育思想(2) 塩崎美穂

◇第四号

巻頭言

幼児の「発達」をどう見るか

佐伯 胖

ツブキ先生の虫のつぶやき(1)

子ども文化の詩学(2)

保育の中の物語(4)

園長のまなざし(4)

春の一日

「感情労働」から保育をとらえ直す

未就園児保育における親子遊びについて

考える

絵本作りを通した自己理解

ひととき(1)

何ごととも最初が肝心

「幼児の教育」ネット公開に寄せて(4)

倉橋惣三の時代の「生活」を垣間見る

保育の現場から

子どもの姿が語るもの

「幼・保・大」連携(28)『ガラス絵』から

見えるもの

山田徹志

佐治由美子

大須賀隆子

松井るり子

京野尚子

太田光洋

田田光洋

岸井慶子

福永恭子

津吹 卓

◇第五号

巻頭言

子どもの成長を長い目で見る

小田 豊

特集 子どもと土

土からの恵み

砂場の魅力

粘土と遊ぶ

ガウデイの壁

園長のまなざし(5)

手をつなぐことから

保育の中の物語(5)

観察のまど・子どものものにわ(3)

「幼児の教育」ネット公開に寄せて(5)

雑誌としての「幼児の教育」 国吉 栄

発達心理学者の子育て奮戦記(7)

北風と太陽

保育の現場から 見えないものを

感じ合うこと

「幼・保・大」連携(29)

「じゃがいもパーティー」とその周辺

菊地知子

◇第六号

巻頭言 未知なる人間の魅力

堀 智晴

特集 子どもと水

自転車世界一周と恩返しの水

坂本 達

夢中になれるもの—水の遊び

保育環境としての水

水によって生み出される子どもの体験

出会いから再会へ 津守 真・津守房江

園長のまなざし(6)

小さき太陽たちへ

保育の中の物語(6)

「幼児の教育」ネット公開に寄せて(6)

実習指導今昔

子ども文化の詩学(3)

保育の現場から

A男との二年間

「幼・保・大」連携(30)「総合的保育者」

養成を支える「人」と「場」

養成を支える「人」と「場」

春野すみれ

浜口順子

青木久子

岸井慶子

自分で考え、自分で遊べ、

子どもたち!

保育の中の物語(7)

岸井慶子

藤方洋子

岸井慶子

岸井慶子

岸井慶子

岸井慶子

絵本と共に育つ子どもたち 小林 徹  
園長のまなざし(7)

緊張の静

前原 寛

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(7)  
公開システム構築と運用の立場から

茂出木理子

ツプキ先生の虫のつぶやき(2) 津吹 卓

観察のまど・子どもものにわ(4) 砂上史子

中国における幼稚園園内研修の

新たな試み

木全晶子

地域の宝みんなまで四人になっても

金澤妙子

保育の現場から お店屋さんごっこを

めぐって

吉岡晶子

「幼・保・大」連携(31) 保育園・幼稚園

と親のかかわりを考える 小玉亮子

### ◇第八号

巻頭言 職員室の保育

渡邊保博

特集 緑蔭図書紹介

生活・平和・いのち

吉業研司

「カラマーゾフの兄弟」をめぐる

父娘対話 石川雄一・石川眞佐江

だいすき！の絵本たち

河野優子

『永遠のなかに生きる』を読んで

大島孝子

ぐるぐる・もこもこ たのしいね

山崎奈美

園長のまなざし(8)

かわいい、かくれんぼ

松永克子

発達心理学者の子育て奮戦記(8)

トイレトレーニング

長田瑞恵

子ども文化の詩学(4)

保育の中の物語(8)

岸井慶子

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(8)

『幼児の教育』を通してみる保育者の

実践研究の歩み 小山みずえ

保育の現場から 子どもたちの心に目を

向けて 白石 肇

「幼・保・大」連携(32)「わたしたち」の

はすねっこ体験 菊地知子

### ◇第九号

巻頭言

子どもの心を受け止める 武田京子

特集 子どもと動き

たかが 子どもの動き、されど 子ども

もの動き 宮丸凱史

体で遊ぼう！何でも表現！ 栗原知子

子どもの当たり前の動き 柴坂寿子

遊びの中で動きが生まれる 宮里眺美

ひととき(2) 映画雑学 戸田奈津子

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(9)

『幼児の教育』誌に見る和田實の

「感化誘導の保育」 日吉佳代子

園長のまなざし(9)

目と眼で通じ合う確かな成長と信頼感

鳩山多加子

観察のまど・子どもものにわ(5) 砂上史子

保育の中の物語(9) 岸井慶子

保育の現場から 二学期始まりの風景から 高橋陽子

「幼・保・大」連携(33)

「保育者養成」をめぐるメール書簡(1)

上垣内伸子・佐治由美子

### ◇第十号

巻頭言

デンバーでの比較文化体験 高濱裕子

特集 子どもと祭り

地域のふれあいには、子どもを真ん中に

豊倉 厚



ドイツ キンダーガルテンでのお祭り

ベルギー有希子

地域でのお祭り体験

小泉かおる

祭りの服飾

和田早苗

保育の中の物語(1)

岸井慶子

園長のまなざし(10)

母の思いと教師の心もち

田畑智枝

子ども文化の詩学(5)

森下みさ子

ツブキ先生の虫のつぶやき(3)

津吹 卓

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(10)

吉村 香

読み手の倫理観

大川理香

保育の現場から

子ども園と共に

「幼・保・大」連携(34)

大川理香

「保育者養成」をめぐるメール書簡(2)

上垣内伸子・佐治由美子

上垣内伸子・佐治由美子

上垣内伸子・佐治由美子

◇第十一号

巻頭言

みんなであることの意味を味わえる

保育

戸田雅美

特集 子どもと風

風の声が聞こえる

桐ヶ谷まり

女の子たちの風車

黒須和清

からっ風にはぐくまれて

みよしのりえ

イタリアの風に吹かれて

新開一司

園長のまなざし(11)

早川好江

園長の恩返し

砂上史子

観察のまど・子どものものにわ(6)

諏訪義英

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(11)

長田瑞恵

『幼児の教育』を通して倉橋理論の流れを追う

渡邊満美

保育の中の物語(11)

岸井慶子

発達心理学者の子育て奮戦記(9)

お姉ちゃん

お姉ちゃん

長田瑞恵

保育の現場から

ほけんしつ

ほけんしつ

渡邊満美

「幼・保・大」連携(35) 一〜二歳児のガラス絵から、からだを喜ばせて表す子どもの姿に学ぶ

瀧田節子

「幼・保・大」連携(35) 一〜二歳児のガラス絵から、からだを喜ばせて表す子どもの姿に学ぶ

瀧田節子

「幼・保・大」連携(35) 一〜二歳児のガラス絵から、からだを喜ばせて表す子どもの姿に学ぶ

瀧田節子

◇第十二号

巻頭言

幼児が表現することとは 名須川知子

特集 第六十二回日本保育学会から

保育士養成校卒業生の就労意欲

保育士養成校卒業生の就労意欲

尾木まり

「ドラマワークシヨップ」による

保育者養成の意義 小林由利子

病児の不安を緩和するための入院

パンフレット 大沼郁子

報告「保育学会を見ました」

佐藤嘉代子・児玉理紗・安田真穂

園長のまなざし(12)

木村英美

日本の豊かな文化に触れる

森下みさ子

子ども文化の詩学(6)

岸井慶子

『幼児の教育』ネット公開に寄せて(12)

倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たち

倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たち

立浪澄子

の実践研究の歩み

雪に暮らし、雪と遊ぶ

保育の現場から

子どもたち

「幼・保・大」連携(36) さまざまな現場にある保育者の共同省察

伊藤克実

「幼・保・大」連携(36) さまざまな現場にある保育者の共同省察

伊藤克実

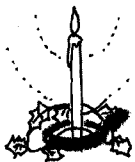
「幼・保・大」連携(36) さまざまな現場にある保育者の共同省察

伊藤克実

佐治由美子・猪本こを

幼児の教育 第一〇八巻(平成二十一年)

総目録



## 編集後記

1年間の総目録を載せる12月号が巡ってきました。1月号から毎月連載された岸井先生の保育物語。いつも、はっとするような子どもの姿を、ビデオを通して教えてくださいました。奇数月連載の砂上先生にはそのいきいきした保育的考察の源にある観察記録を公開していただき、参考にされた方も多いのでは。偶数月には森下先生の子ども文化論。その「詩学」のおもしろさに引き込まれました。

2010年は、いくつかの新たな連載と共に、倉橋惣三と出会い直そうという年間企画があります。1月号では津守真氏に倉橋についてインタビューしています。ご好評いただきましたヨシエさんによる表紙とはお別れですが、また、新しい顔でお目にかかります。どうぞお楽しみに。(H)

## 幼児の教育 第108巻 第12号

平成21年 12月 1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集部 金子めぐみ  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社 フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円 (本体524円)  
©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵 ヨシエ  
扉カット ヨシエ  
扉題字 津守 眞  
カット 田崎トシ子  
編集委員 高橋陽子  
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

### 次号予告

### 〈特集〉いま、倉橋と出会う (1) 「こころもち」

●インタビュー● 津守 眞・津守房江 (聞き手 江波諄子)

・嶺村法子・浜口順子

・新連載 前原 寛・国吉 栄

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



### ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開開始まりました！  
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"  
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/> へアクセスしてご覧下さい。  
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。  
ご意見ご感想などは、[youjimap@yahooc.co.jp](mailto:youjimap@yahooc.co.jp) までお寄せ下さい。

保育の計画・記録・評価でお困りの先生、計画作成でスキルアップを目指す先生におすすめの1冊です！

# すぐに役立つ！ 保育の計画・記録・評価

計画作成 -CD-ROMソフト付-

監修／網野武博 編著者／寺田清美・田中浩二

新保育所保育指針に基づいた、保育課程編成、指導計画の作成、各種計画・記録など順を追って解説し、体系的な理解を促し、CD-ROMソフトを使ってさまざまな計画が作成できます。

●簡易ソフト

〔パソコンで作る保育の計画と記録〕



10911

新人からベテランまで

26×21cm 120ページ 定価 3,990円 (税込)

保育課程編成

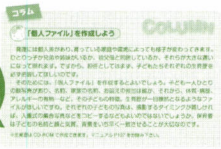
やさしくサポートします。

読みやすい解説文で理解もスムーズに！

## 本書の特徴

- ① 保育所保育指針改定のポイントをズバリ解説！
- ② 日々の保育と結びつくわかりやすい解説文！
- ③ 簡易ソフトと解説で計画作成がさらにスムーズに！！

難しいところはコラムでわかりやすく！



キンダーブックの  
**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

平成 21 年 4 月実施の  
「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」に完全対応!  
最新の「保育の動向」がわかる「保育学」の決定版!

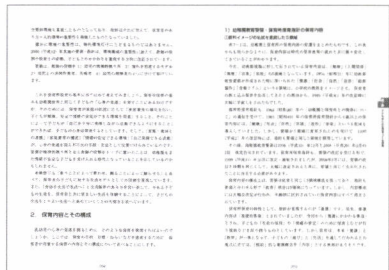
「保育の基本」から「保育の全体」が、  
この1冊でよくわかる!

改訂新版  
**現代保育学入門**

諏訪きぬ／編著

「保育の基本」から「保育の全体」を捉え、好評だった『New 現代保育学入門』が、最新情報を取り入れた内容になり、さらに使いやすくなりました。「保育学」を学ぶみちしるべ“道標”として、保育現場はもちろん、テキスト・補助教材にも大いに活用できます。

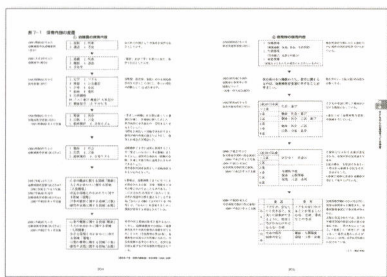
21×15cm 308ページ 定価2,100円(税込)



36302

— もくじ —

- はじめに
- 第1章 子どもと出会うということ
  - 第2章 子育てにおける家庭・社会の役割
  - 第3章 家族・家庭のあり方と保育サポート
  - 第4章 保育者になるということ
  - 第5章 日本の幼稚園・保育所の歩み
  - 第6章 「育つ」と「育てる」のあいだ
  - 第7章 子ども中心の生活をつくる保育
  - 第8章 保育の見通しを立てるということ
  - 第9章 先人が保育・教育について考えたこと
  - 第10章 21世紀の保育の創造と保育の課題
- おわりに



キンダーブックの  
**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五四四円)☆